

ホアロク文化とそのベトナム先史時代における位置づけ

大 林 太 良

一 はじめに ⁵⁻¹² (10.5 f. 9)

1973年、ベトナム北部のタインホア省でホアロク (Hoa Loc) 文化が発見された。本稿は同文化について、ハノイのベトナム歴史博物館から1977年に発行された報告書¹⁾の内容を、同書巻末の仏文レジュメおよび図版にもとづいて紹介し、ついで手許の文献を利用して、出土品の比較を試み、それにもとづいて同文化がベトナム先史時代において占める位置について考えてみたものである。

二 ホアロク文化の内容

1973年11月末、ハノイの歴史博物館の研究者たちは、タインホア省文化局の幹部たちと共同調査中、同省のハウロク (Hau Loc) 郡のホアロク (Hoa Loc)、フロク (Phu Loc)、リエンロク (Lien Loc) の諸村の海岸部に一群の遺跡を発見した。最初の試掘の結果、これらの遺跡が若干の共通の特徴によって関連し合っていること、全く新しく極めて興味深い様相を呈していることが直ちに明らかになった。そこで二遺跡が選ばれ、1974年と1975年に発掘された。つまりホアロク村のコンサウチョ (Con Sau Cho) 遺跡と、フロク村のコンゲ (Con Nghe) 遺跡である。

a ホアロク遺跡

ホアロク村にある遺跡は、コンサウチョ (文字通りには市場の裏の砂丘) という、大体北東から南西の方向に走っている帯状の砂丘を占めている。砂丘の頂丘は周囲の水田から3メートル高いだけである。

発掘は400平方メートルの表面において行われた (第1図)²⁾。

文化層が始まる深さは、0.2メートルから0.7メートルに至るまでさまざまである。文化層は単一で、同質的であり、かつ厚さはあまりない。つまり、30センチから90センチである (第2図)³⁾。

2シーズンの発掘によって出土した遺物は稀にみる豊かなものであった。遺物はすべて石器と土器であって、青銅器の痕跡は全くない。これら遺物は道具、装身具、土器に三分される。

道具のなかには、方角石斧 (片刃のものも両刃のものもある) (第3図, 第4図1—9)⁴⁾、有肩石斧 (第4図10—12)⁵⁾、靴形石斧, 石斧 (有肩のもの, あるいは方形のもの), 犁頭だと認められ

るもの、槌打器 (percuteur)、砥石がある。他方では、石製戟〔図版のどれを指すのか不明〕、2つ凹みのある用途不明の石塊 (第9図)⁹⁾ が出土した。この最後のものは、靴形石斧、石鍬、石製犁頭(?)と同様、ベトナムでは始めて発見されたものである。

ホアロクの靴形斧 (第5図)⁷⁾ は、踵と爪先がはっきり分離していて、ドンソン文化の同じ形式の青銅製の道具と同一の輪郭を示している。刃部は刃と平行の凸状線によって斧体から区別されている。またかなり長い着柄用柄がある。こうして一般的形態は、ふつうの有肩石器から由来したもののようと思われる。

石鍬には2形式ある。1つは有肩のもの (第6, 7図)⁸⁾。もう1つは方形のもの (第8図)⁹⁾ である。この道具の形状と製作技術を研究してみると、形も用途も金属製の鍬と同じだという結論を確信をもって下すことができるという。ちなみに、石鍬はその多量に出土したごとと、多様性のゆえに、ホアロク文化の重要な特徴の1つである。

そのほか出土品中には、形状も一定せず、刃もはっきりしない多数の遺物がある。縁の使用痕が大変複雑で、正確に用途を決め難い。しかし土掘りか、種取り (égrener) か、あるいは樹皮はがし用に使ったのかも知れない。

装身具は数も少く、仕上げも簡単であるが独創性がないわけではない。

石製腕輪は、どれ一つ無傷のものはなかった。腕輪はベトナムの後期新石器時代のどの遺跡のものに劣らず完成されたものだった。製作に当っては、穿孔、擦切り、研磨の技術が用いられていた。これらの腕輪は、形態ごとに横断面によって1—4までの4形式に分類される (第22図1—6)¹⁰⁾。

土を焼いて作った腕輪は、ホアロクでは破片が2個発見されただけである。それらは砂を混ぜた粘土で出来ており、泥漿を塗ってあり、高熱で焼かれていた。形状については、石製腕輪の第2形式に属する (第22図7)¹¹⁾。

最後に別に取り上げるに値する一形式の土器がある。これは、極めて多種多様の文様のついた土器製の押型 (matrices) である。これはこれまでベトナムの新石器遺跡では発見されたことは稀であったが、始めてホアロクとフロックにおいて多量に出土した。この両遺跡で発見された数万片もの土器片の装飾モチーフ中、この押型に対応するものは見つからないので、恐らくこの押型は布地か、それとも人体に文様を捺印するのに用いられたのであろう。もしそうなら、これは当時の人間の精神生活研究上、大いに興味深いものである (第10—11図)¹²⁾。

b フロック遺跡

フロック遺跡は、かなり大きな砂丘コンゲの上にある。この砂丘の大部分はフロック村に属し、残り (コンマホ Con Ma Ho と呼ばれる) は、ホアロク村の一部をなしている。このフロック遺跡から上記のホアロク遺跡まで約2000メートルの距離がある。この遺跡も1974, 75年の2シーズンに920平方メートルの表面が発掘された。

この遺跡でもホアロク遺跡と同様、文化層は地表からかなり浅いところから、つまり20センチか

ホアロク文化とそのベトナム先史時代における位置づけ

ら60センチのところから始まり、文化層の厚さは20センチから70センチの間である。この文化層も単一で、同質的であるが、ただ例外が1つある。それは西部であって、ここでは黒色の土塊が、大なり小なりの深さで無包含層の中に食い込んでいるのが認められる。これは炉跡であって、灰の中に獣骨やその他の残滓が混入している(第12図)¹³⁾。

フロク遺跡出土の遺物はホアロク出土のものと同じ形式のものである〔方角石斧、有肩石斧、靴形石斧、石鍬などをさす〕。ただこの例外をなしているのは、耳環と、土を焼いて作った3個のビーズである。

耳環は8個あり、いずれも第2シーズンに出土したものである。その元来の形は1匹の蛭が、その頭と尻尾を殆んど接せんばかりに身体を丸めた姿を幾分思わせるものがある(第26図1—3)¹⁴⁾。粘土と砂を混ぜた土で出来、赤か濃褐色の泥漿が塗ってあり、粗末で手づくねで作られている。耳環のうち2個には、装飾として簡単な刻線が施してある。その他のものは無文である。

ビーズはかすかに平た目の球形をなしている。穴が1つ明いているが、大変細い穴で、麻の細糸が1本通るだけである。

c 土 器

土器はホアロクとフロクの両遺跡ともに多量に出土したばかりでなく、大変類似しているので、同一の文化複合に属すると見て差支えない。同時代の他の遺跡から出土した土器と比較して、この両遺跡の土器の主な特徴は、形と装飾が極めて多様なことである。

土器について第一に注目すべきことは、その大きな密度である。1平方メートル当り800個から1000個の土器片が出土するものであり、またどれも下ごしらえの土器(ébauche)ないし製造途中の土器ではなかったように見える。

次に器形は極めて多様であり、そのうち若干は未知のものだった。縁が内彎した容器、方形の口をもつ容器、腹が鱗の形をとった容器、方形の広口碗、さらに多角形の輪郭をもつ謎の物体——これらの存在はホアロク、フロクの土器に、今日までベトナムで知られている他のアンサンブルとは全く異なる様相を与えている(第13—17図)¹⁵⁾。

文様もまた多様であり、独創的である。モチーフのなかには新しいもの、奇妙なもの、時には愉快なものもあり、豊かな想像力と高度の美感を表している。

d ベトナム後期新石器時代におけるホアロク文化の位置

発掘中にこの地域においてサーヴェーを行った結果、ホアロク、フロク両遺跡と、その性格と時代が同じであるような一連の他の遺跡が存在することが明らかになった。これらの遺跡は、レン(Len)河の河口とラクチュオン(Lach Truong)河(つまりマ Ma 河)の河口との間を海岸沿いに、ハウロク郡の境界内において、諸砂丘の上に分散しているのである。

このようにして、ホアロクとフロクで行った発掘は、一つの重要な遺跡群にかかわっているので

あって、この発掘によりその主な特徴を把握することができる。

これらの発掘によって、2つの初次的確認がなされた。つまり、一方においては、これら諸特徴のあるものは、さまざまな度合いにおいて、ベトナムの他の後期新石器文化の特徴と一致している。そしてその一致の仕方は、これら諸文化はどれも——少なくともホアロクとフロクを含んだ殆んどすべての文化は——同一の源泉、つまり、ホアビニアン=バクソニアン文化から派生したものだと呼んで差支えないほどのものである。

他方においては、特殊な発展の道程に沿って、ホアロク=フロクのインダストリーは若干の固有の特徴をもつに至っており、これにホアロク文化という用語を採用させるのに十分なほどである。

この重要な発見により、現在のタインホア省の海岸地方に紀元前16ないし15世紀に住んだ諸部族を知るようになった。この年代は遺物の形式学的研究にもとづく推定値であって、物理学的方法による正確な測定を今後二期している。

この住民は農耕民であり、漁民であり——ことによると狩猟民であって、同時代の北ベトナムの他の諸族と文化的には親縁のものであった。彼等は、ホアロクとフロクの両遺跡で多量に発見された石鍬からみて、海岸平原において稲やイモ類の栽培を行っていたに違いない¹⁶⁾。

三 若干の考察

以上が同報告書要約の内容である。これから、ホアロク、フロク両遺跡出土の遺物を他のベトナム先史文化のものと簡単に比較することにしたいが、その前に、これら両遺跡の地理的位置について一言しておく必要がある。

詳しい地図が利用できないため、大体のことしか言えないが、両遺跡は、アンナン北部のタインホア省の東北部にあり、その南には磚室墓で有名なラクチュオン (Lach Truong)、西南には、ドンソンの諸遺跡とともにマ河沿いにもち、北には新石器時代といわれるチョガン (Cho Ganh) 遺跡がある、というように、周囲に重要な遺跡が多いところである。

ホアロク文化は、豊かな興味深い内容をもつ点で重要なばかりでなく、タインホア省東北部において、ドンソン文化が栄える恐らく少し前の時期に存在した文化という点でも重要である。また、後期新石器時代から初期金属器時代にかけてのベトナム中部以北の海岸においては、北のトンキンのハロン (Ha Long) 湾文化と南のアンナン中部のバウチュォ (Bau Tro) 文化の存在が知られていたが、その中間のアンナン北部海岸は、今まで空白状態だった。それが今回の調査でそこにはホアロク文化があったことが明らかにされたのである。

ところで、新石器時代後期から初期金属器時代にかけてのベトナム先史時代は、近年次第にその像が鮮明の度を加えつつある。何よりも重要なことは、紅河流域において、フングエン (Phung Nguyen)、ドンダウ (Dong Dau)、ゴムン (Go Mun) という一連の文化の存在が確認され、ドンソン文化に先行する諸文化段階の存在が知られるようになったことである¹⁷⁾。

そして私の考えでは、ここにとりあげるホアロク文化も、その北方の紅河流域において展開した

ホアロク文化とそのベトナム先史時代における位置づけ

これら諸文化の系列とは無関係ではなかったと思われる。単に地理的に近接しているばかりでなく、具体的な遺物において、いくつかの類似や共通性がみられるからである。

それらの類似のいくつかは、フングエン文化に見られる。

たとえば、土器の文様のなかにも、図18に示した文様¹⁸⁾は、フングエン文化の土器に施された文様と最もよく似ており、ドンソン文化の青銅器にもいくらか似た文様はあるものの、フングエン土器のものの方がよく似ている¹⁹⁾。同様に図19に示したホアロク土器の文様は²⁰⁾、フングエン、ドンダウ、ゴムの土器およびドンソン青銅器に類似した文様をもつが²¹⁾、そのなかでも最も似ているのはフングエン文化のものである。

このほか、ホアロク文化は、あとで触れるように砥石においてもフングエン文化と類似を示しており、たしかにフングエン文化とは何らかの関係があると思われる。したがって、後述のように発掘報告書の筆者をはじめ、ベトナムの考古学者の間には、ホアロク文化とフングエン文化との関係を重視する声が高いのは無理からぬところである。

しかし、私の見るところでは、紅河流域の諸文化のうち、ホアロク文化とことに比較すべきものは、フングエン文化よりも、そのすぐあとに続くドンダウ文化であるように思われる。

土器の文様にもドンダウ土器のものに似たものがある。第20図に示したホアロク土器文様の2例は、2つの反対方向を向いた渦巻きの間を平行直線が走り、また渦巻と平行直線との間の地には短い平行線の並列がある²²⁾。このような文様は、紅河地域の諸文化のうち、私の気づいたところではドンダウ文化の土器にのみ類似したものが見出される²³⁾。

また今あげた文様と関連したものとして、三本の平行曲線でできた束が斜めにいくつも並び、その平行曲線の束と束の間に、これとほぼ直角の角度で短い平行線が数本並ぶ文様がホアロク土器にあり、ここではその4種をあげた(図21)²⁴⁾。これらとピッタリと同じ文様は、私はまだ他のベトナム先史文化中に見出してはいない。しかし、比較的類似した文様はやはりドンダウ文化にみられる。ただそこでは平行曲線の束の並列ではなく、蛇行する平行線の束の形をとる点において、また平行線が3本でなく4本である点において、相違している。また本図に示したホアロク土器の文様には、斜の平行線の束と水平の平行線とが組み合わさっている形式がしばしばみられる(図中の1, 2, 4)。これに比すべきものもやはりドンダウ土器(6)に見られるが、ただ水平の平行線が、直線ではなく波線になっている点が相違している²⁵⁾。

このように土器の文様においても、ホアロク文化はドンダウ文化との間にある程度の類似を示すが、それがもっと顕著に現われているのは装身具である。

そのような装身具の1つは石製腕輪である。これはホアロク、フロック両遺跡から出土しており、報告書はホアロク出土のもの(第22図)²⁶⁾を四形式、つまり図版に則していえば、第一形式(1, 2)、第二形式(5)、第三形式(4, 6)、第四形式(3)に分類し、そのほか、土を焼いて作った腕輪(7)があり、これは石製腕輪の第二形式に対応する²⁷⁾。またフロック遺跡出土の石製腕輪も四形式に分類されているが、これはホアロク遺跡の場合とは別個の分類で、共通の統一的な分類で

はない。つまり第一形式（第23図4, 5, 6）, 第二形式（1, 2, 3）, 第三形式（7, 8, 9）, 第四形式（11, 12）である^{28）}。

しかし、このような詳しい分類はともかくとして、ホアロク文化の石製腕輪には、断面が三角形からT字型に至るさまざまなヴァリエーションを示すものが多いこと、またかなり幅広であるように見受けられることが目につく。

これを紅河流域の諸文化のもの（第24図^{29）}と第25図^{30）}）と比較すると、いま挙げた2つの特徴において、やはりドンダウのもの（第24図上）と最もよく類似しているように思われることは無視できない。

装身具におけるホアロク文化とドンダウ文化との類似には、さらにフロク遺跡から出土したいわゆる蛭状耳飾りがある（第26図1—3）^{31）}。紅河流域の諸文化中、このような耳飾りは、私の知っているのはドンダウ文化の例だけである（第26図4—5）^{32）}。

面白いことに、ベトナムのいわゆる蛭型耳飾り、最近、アンナン中部のジャ・ビン(Nghia Binh)省、ビン・ソン(Binh Son)県のビン・チャウ(Binh Chau)遺跡からも出土した（第26図6—7）^{33）}。ここは集落址と墓の双方があり、青銅鏃、斧、鋤型、ルツボ、高脚の土器なども出土しており、報告者ゴー・シ・ホン(NGO SY HONG)によれば、北のドンソン文化と南のサフィン文化とをつなぐものであると見られ、年代は紀元前2千年紀末から、1千年紀初頭であるという^{34）}。この遺跡は、ホアロク文化と同様に、アンナンのしかもやはり海岸地方に位置していること、そして提案された年代も、ホアロク文化について考えられるものと近いことなどを考え合せると、恐らくホアロク文化について考えるに当たって重要な比較資料となる遺跡ではないかと思われる。

次にとりあげたいのは石槍である。報告書には、フロク遺跡から出土した、かえりのついた磨製石槍先を図示している（第27図1）^{35）}。ところが報告書本文における石製槍先の項では、この出土品に言及せず、かえってより小型のむしろ石鏃とみるべきもの（第27図2）^{36）}を、小さいが石槍先だとして記述しており、かつドンソン文化中に同形式の青銅製のものがあるとつけ加えている^{37）}。

この本文の記載は、より大きな石槍先を無視し、小さく石鏃とみるべきものを石槍先としている点で腑に落ちないばかりでなく、同様なものが青銅製でドンソン文化にもあるという点でも奇妙である。

と言うのは、フロク出土のものは(小もかりに槍先としても)、大小ともにかえりがついている点に特徴がある。ところが、フングエンからドンソンに至るまで石製、青銅製を問わず、かえりのついた槍先は稀である。ただその例外をなしているのはドンダウ文化における平たい骨製の槍先であって、これにはかえりがついている（第27図下）。『ベトナム歴史』第一巻はこれを図示して槍先と記しているが^{38）}、グエンは恐らくこれと同じ写真に基くと思われる線描画を図示し、これに骨製銛という説明をつけている^{39）}。ことによるとこの銛という解釈のほうが正しいかも知れない。もしそうだとすると、フロク遺跡が海岸に位置することから見て大変面白い。そのことはともかくとして、フロク出土のかえりつき石槍の類似品は、ベトナム北部では、私の知る限りでは、ドンダウ文化に

のみ見出されることは注目に値する。

次にかえりのついた鏃は、かえりのついた槍よりも多い。つまりフングエン段階において石鏃(骨鏃?)として現れ、その後ドンダウ、ゴムン、ドンソンの各段階では青銅器として現れている⁴⁰⁾。ことにドンダウ、ゴムンの両段階においては、かえりつき鏃が普通らしい。またドンソン文化とサフィン文化を連結する位置を占めるといふあのビンチャウ遺跡においても、かえりつきの青銅鏃が出土している⁴¹⁾。

したがってかえりのついた青銅鏃は、紅河流域の諸文化には極めて普通であり、もしそれがホアロク文化の石鏃の原型であったとしても——果してそうであるか否かは明らかでない。少なくとも、外形はあまり似ていないものが多い——、今のところ特定のどの文化のものがホアロクの石鏃と関連していると確定するのは困難である。

同様な困難は、ホアロク遺跡出土のいわゆる靴形石斧についてもある。報告書は、それらが「ドンソン文化の青銅製の道具と同一の輪郭を示している」と記している。しかし、報告書に図示された靴形石斧なるものは、刃が縦軸に対して斜めでなくほぼ直角であり、有肩石斧がたんに両肩でなく片肩になっているのに過ぎないようなものであって、ベトナムの考古学者中にも、これを果して靴形石斧と呼んでよいか否かについては異論もあるらしい⁴²⁾。

しかし、これを一応靴形だと認めた場合にも、報告書の記述には問題がある。つまり、青銅製の靴形斧は、ベトナムではドンソン文化以前からすでに存在しているからである。ドンダウ文化にも⁴³⁾、ゴムン文化⁴⁴⁾にも存在しているのである。しかもそれらは輪郭は基本的には相互に類似しているのであるから、ドンソン文化のものとのみ比較するのは当を失する。いずれにしても、靴形石斧なるものは、ホアロク文化とドンダウ——ドンソン系列中の特定の文化とを結びつける標識としては適当でない。

以上、私はホアロク文化とフングエン以降ドンソンに至る主として紅河流域に発達した文化系列との間の関係を若干の要素を手がかりに考えて来た。その結果、遺跡の文様、装身具などにおいて、いくらかの類似が見られること、そしてそれら類似点の存在するのは、フングエン文化とドンダウ文化であることを指摘してきた。

ここで生ずる問題は、このような類似からホアロク文化の年代について何が言えるかという点と、ホアロク文化構成にとって、それら類似はいかなる意味をもつかという点の2つである。

まず年代の問題を考えてみることにしよう。さきに述べたように、ホアロク文化は、フングエン文化とドンダウ文化とにそれぞれ類似要素をもっている。さて報告書の著者は、ホアロク文化の年代を最も早くて前15—16世紀と考えた。その理由は次の通りである。彼等が、ホアロク文化にはフングエン文化に類似する要素をもつが(具体的には何を指すのか筆者には不明)、フングエンのものよりも粗末である。フングエン文化は前期が前18—15世紀、後期が前15—13世紀に分れるから、ホアロク文化は前期の終りごろをもってするのが適当だろう、という考えである⁴⁵⁾。

しかし、この議論はホアロク文化中におけるドンダウ類似要素の存在を無視した考えであるので

従うわけにはいかない。ここで考えなくてはならない一つの与件は、ホアロク、フロク両遺跡ともに、その文化層は等質的であり、かつ比較的薄いことである。このことは両遺跡がそれぞれの地点において長期にわたって——たとえばフングエンに当る時代からドンダウに当る時代まで——存続したという解釈を困難にするものである。従って、ドンダウ文化がフングエン文化のあとにつづいたという通説に依拠すれば、ホアロク文化の年代はドンダウ文化のほうを基準として考えるのが適当であろう。

それならばドンダウ文化の実年代はどのように考えられるであろうか？。ドンダウ遺跡については、前1377±100という¹⁴C年代が報告されており⁴⁶⁾、他方、新田栄治氏は最近、中国出土の遺物との比較を通じて、ドンダウ文化を前1千年紀前半、ゴーボン（フングエン後期）も前1千年紀前半と推定している⁴⁸⁾。しかし、宇野公一郎氏の教示によれば、この新田説の一つの根拠となった石戈を出土したルンホア（Lung Hoa）遺跡は、ドンダウ前期とみる考えがベトナム考古学者の間にも強く、ドンダウ文化は前2千年紀末から前1千年紀初頭と見ることができるといふ⁴⁹⁾。このように考えてくると、ホアロク文化の年代は、およそ紀元1000年前後ということになるであろう。

ホアロク文化とドンダウ文化との比較は、ドンダウ文化の性格の問題にも触れてくる。つまり、ドンダウ文化は、立派な青銅器文化であるが、ホアロク文化の遺跡からは金属器は発見されておらず、その意味においては新石器文化である。しかし、それは遠からぬ地域に金属器文化が栄え、何らかの形においてその影響をすでに蒙っていた新石器文化なのである⁴⁹⁾。

次に指摘すべきことは、ホアロク文化には北方の紅河流域の諸文化の影響が土器文様や装身具などに及んでいるとは言え、紅河流域の文化系列において特徴的な一連の文化要素がホアロク文化には見られないことである。青銅器がその一つであることは、今述べたところである。そのほか、土器に関しては高杯⁵⁰⁾がこの系列に特徴的に見られ、ドンダウ文化にはまだ例がないようだが、フングエン、ゴムン、ドンソンの各文化に存在している。そしてホアロク文化の土器中には高杯はない。

また装身具については、四隅に突起をもつ玦状耳飾りは、フングエン、ドンダウ、ゴムンの諸文化に知られているが⁵¹⁾、ホアロク文化には存在していない。

このような少数の事例をとってみても、ホアロク文化が、紅河流域の諸文化からの影響をある程度受けていたとはいえ、その影響は決して甚大なものではなく、独自の文化的個性をよく保っていたことが察知されよう。

ところで、ホアロク文化をベトナム先史文化のなかに位置づけるに当って、紅河流域の諸文化と並んで重要な比較資料を提供しているのは、ホアロク同様に海岸の文化たる北のハロン（Ha Long）湾文化と、南のバウチョ（Bau Tro）文化である。ここでは、有肩石斧と、砥石という二つの文化要素をとり上げることにはしたい。

有肩石斧は、かつてはインドシナ新石器文化に特徴的なものと思われていたが、近年の調査により、ベトナムではかなり偏った分布を示し、決してこの地域の新石器文化に普遍的な分布をもつものでないことが明らかになって来た。

そして、ことに重要なことは、紅河流域における新石器時代から青銅器時代にかけての諸遺跡は、石斧としては方角石斧が主であって、有肩石斧は全く出土しないかあるいは出土しても極めて少数に止まっていることである。つまり、ザウ・ズオン (Dau Duong), フングエン (Phung Nguyen), ルンホア (Lung Hoa), ゴボン (Go Bong), ドンダウ (Dong Dau), ヴァン・ディエン (Van Dien), トゥソン (Tuson) などの諸遺跡がそうである⁵²⁾。ここで注意しておきたいのは、タイホア省北部、つまりホアロク遺跡から遠からぬところにあるドンコイ (Dong Khoi) 遺跡である。これは地理的にはやや内陸に位し、また新石器時代中期に属するといわれ、従ってホアロク文化よりも前の時期に属するが、ここもまた方角石斧は多いが有肩石斧を欠く遺跡の一つなのである⁵³⁾。

ところで有肩石斧は、バシャ (Baxa)⁵⁴⁾ やバンモン (Ban Mon)⁵⁵⁾ のようなトンキン山地の《新石器》遺跡からも出土している一方、トンキンからアンナンにかけての海岸において、あたかもホアロク文化をはさむように分布している。つまり、ホアロク文化の北においては、ハロン湾の諸遺跡があり (第28図)、たとえばカイベオ (Cai Beo) 第三層があるが、ここでは方角石斧、有肩石斧のほかに有段石斧も出土している⁵⁶⁾。そしてホアロク文化の南においては、中部アンナンの海岸のバウチョ遺跡⁵⁷⁾やドックチ (Duc Thi) 遺跡⁵⁸⁾などにおいて有肩石斧が出土しているのである (第28図)⁵⁹⁾。つまり、有肩石斧は、ベトナム北部においては、決して海岸に限られたものではないが、ハロン湾から中部アンナンにかけての海岸では、ほぼ普遍的に分布していることは注目してよい。この地域の海岸諸文化の比較研究は、あるいは興味深いテーマかも知れない。

次に取り上げたい文化要素は深い砥溝のついた砥石である。このような砥石は、系譜的には恐らくバクソン文化のいわゆるバクソン^{じるし}印石 (marques bacsoniennes) に遡るものであろう⁶⁰⁾。そして重要なことは、このような砥石はベトナム中部以北の海岸諸文化に広く分布しているばかりでなく、紅河流域の諸文化、ことにフングエン文化においても存在しており、いわば、ベトナム北部の後期新石器時代ないし初期金属時代を特徴づける共通要素の観を呈していることである。

まず海岸の諸文化を見よう。

砥石は、ホアロク遺跡からも (第29図1—3)⁶¹⁾、フロク遺跡からも (第29図4—7)⁶²⁾ 出土している。同様な砥石は、またハロン湾文化 (図30下)⁶³⁾ にも発見されている。さらに古くはパット (PATTE) が中部アンナンのバウチョ遺跡からも報告していた⁶⁴⁾。また、砥石を出土した紅河流域の諸文化としては、フングエン文化 (図30上)⁶⁵⁾ (遺跡としてはフングエン、ヴァンディエン Van Dien の両遺跡)⁶⁶⁾、それに恐らくドンダウ文化に含められるルンホア遺跡がある⁶⁷⁾。

ここでつけ加えておきたいのは、ホアロク文化は海岸の文化とは言え、基本的には農耕民文化であることである。つまり、数多くの石鋤、それに石スキと言われるもの⁶⁸⁾があり、石鋤は使用痕があり、石斧よりも軽いという⁶⁹⁾。そしてホアロク、フロク両遺跡から出土した獣骨中、最も多いのが猪と家豚であった。そのほか、鹿、牛、水牛の骨角も、言及に値する量で出土している。これに反して肉食動物は比較的少い。また魚骨は多いが鳥骨はなく、甲殻類もない⁷⁰⁾。家豚の多いことは定住的な農耕生活を物語るものであろう。しかし猪や鹿の骨は、肉のための狩猟も行ってたこと

を示唆している。牛や水牛が果して家畜か否か、家畜なら単に供饌用に飼育されていたのか、それとも犁耕に用いられたのかは、今後ホアロク文化の性格を考える上で、重要な点となる。また魚骨が出土したことは、漁撈も行ってたことを物語っており、また網錘も出土している¹⁷⁾。

以上、私が述べて来たことを要約すると、ホアロク文化は、紅河流域の青銅器文化から、弱い影響を受けた《新石器文化》であり、その年代はドンダウ文化と並行する時期と思われ、およそ前1千年前後であろう。しかし、ホアロク文化は紅河流域の諸文化とは異った独自の個性をもつ文化であり、ハロン湾文化やバウチョ文化など、他の海岸諸文化と共通する面もみられる。農耕民であるが狩猟や漁撈も併せ行っていた。

さきにも述べたように、ホアロク、フロクの両遺跡は比較的短期間しか続かなかったように思われる。問題は、それではこれら両遺跡ないしホアロク文化の前段階をなす文化、遺跡は何であったか、またホアロク文化はその後どうなったのであろうか、両遺跡よりやや後に、すぐ南に開花したドンソン遺跡とはいかなる関係が考えられるのであろうか、という諸点である。これらの問題の解答がベトナム考古学の発展により、近い将来に与えられることを期待してやまない。

註

- 1) PHAM & QUANG, 1977. 同報告書の利用の便をはかって下さった東京大学教養学部古田元夫氏に感謝する。
- 2) 原第1図
- 3) 原第2図
- 4) 原第3図, 原第4図1—9も参照
- 5) 原第4図10—12
- 6) 原第15図4
- 7) 原第5図
- 8) 原第6, 7図
- 9) 原第12図
- 10) 原第16図1—6
- 11) 原第16図7
- 12) 原第40, 41図
- 13) 原第19図
- 14) 原第38図11—13
- 15) 原第46図—50図
- 16) 以上の紹介は、PHAM & QUANG, 1977: 244—247 の仏文レジюмеによる。
- 17) NGUYEN, 1975; レ 1975; DAVIDSON 1979も参照。
- 18) 原第54図4
- 19) レ, 1975, 第1図 (そこではドンソン青銅器を誤って土器だと記してある。)
- 20) 原第55図13
- 21) レ, 1975, 第1図
- 22) 原第54図1a, 第56図8
- 23) レ, 1975, 第1図
- 24) 原第54図7・8, 55図1・2
- 25) レ, 1975, 第1図

- 26) 原第16図
- 27) PHAM & QUANG, 1977 : 69-70
- 28) 原第38図, 分類は PHAM, QUANG, 1977 : 135
- 29) レ, 1975, 第 8 図
- 30) TRAN et al, 1975 : 170
- 31) 原第38図下 1-13
- 32) TRAN et al. 1975 : 173, fig. 16, 17
- 33) NGO, 1980 : 71, fig. 6
- 34) NGO, 1980
- 35) 原第38図 1
- 36) 原第38図 2
- 37) PHAM & QUANG, 1977 : 133-134 (宇野公一郎氏の教示による)
- 38) Uy Ban Khoa Hoc Xa Hoi Viet Nam, 1971 : p. 41の図版 (ドンダウ文化)
- 39) NGUYEN, 1975 : fig. 111
- 40) レ, 1975, 第 4 図 : NGUYEN, 1975 : fig. 112, 118 ; BEZACIER, 1972 : fig. 50e, p. 126
- 41) NGO, 1980 : fig. 7
- 42) 宇野公一郎氏の教示による。
- 43) レ, 1975, 第 5 図 ; TRAN et al., 1975 : p. 173, fig. 4
- 44) レ, 1975, 第 5 図 ; TRAN et al., 1975 : p. 179 ; NGUYEN. 1975 : fig. 123-124
- 45) PHAM & QUANG, 1977 : 220, 宇野公一郎氏の教示による。
- 46) NGUYEN, 1975 : 55
- 47) 新田, 1981, 60
- 48) 宇野氏よりの1981年12月15日付けの私信による。
- 49) このような性格の新石器文化は東南アジア大陸部では他に例がないわけではなく, たとえばタイのкок・チャロエン Kok Charoen 遺跡 (WATSON 1979) もその一つである。なお宇野公一郎氏の教示によれば, その後ホアロクにおいて青銅の棒が発見されたというが, 出土状況も不明であるばかりでなく, 上の考えを大きく左右する性質のものとは思われない。
- 50) レ, 1975, 第 2 図 ; NGUYEN, 1975 : fig. 68, 108 ; Uy Ban Khoa Hoc Xa Hoi Viet Nam, 1971 : 39 ; TRAN et al, 1975 : 167
- 51) レ, 1975, 第 9 図 ; NGUYEN, 1975 : fig. 59, 115 (宇野氏によれば115左のものは広義のフングエン文化に入れるべきもの) ; Uy Ban Khoa Hoc Xa Hoi Viet Nam, 1971 : 41 ; TRAN et al 1975 : 173(15)
- 52) NGUYEN, 1975 : 44-45 ; BORISKOVSII, 1970-71 : 229, 233, 235. ただしフングエン遺跡の近くのゴコンロン Go Kon Lon 遺跡には有肩石斧が多い (BORISKOVSII, 1970-71 : 236-237)
- 53) NGUYEN, 1975 : 40 ; BORISKOVSII, 1970 : 161, fig. 36(1)
- 54) MANSUY et COLANI, 1925 : 38-40
- 55) COLANI, 1928 : 20-22
- 56) NGUYEN, 1975 : 112-113, fig. 91-92 ; HA, 1976 : 181
- 57) PATTE, 1924 : 523-524, pl. XIX : 7-15, XX : 1-2
- 58) COLANI, 1930 : 344-355
- 59) 近年出版されたベザンエ BEZACIER やグエン NGUYEN のベトナム考古学概説には, それぞれ有肩石斧の出土地が列挙してあるが (BEZACIER, 1972 : 63 ; NGUYEN, 1975 : 44), とともにそのなかにトンキンのビンカ Binh Ca 遺跡やチョガン遺跡を含むなど, 不正確なところが見られるのは遺憾である。ビンカについては, MANSUY, 1920 : VII(II), チョガンについては COLANI, 1928 : 23-37 を参照。
- 60) BORISKOVSII, 1970-71 : 229-230, 233
- 61) 原第15図 1-3
- 62) 原第37図 4-7
- 63) NGUYEN, 1975 : fig. 93-95, 98
- 64) PATTE, 1924 : Pl. XXI

- 65) Uy Ban Khoa Hoc Xa Hoi Viet Nam, 1971 : 39
 66) BORISKOVSII, 1970-71 : fig. 38 (4, 5), p. 229-230
 67) BORISKOVSII, 1970-71 : 235
 58) スキかといわれるものは, 原図 6 (2), 31
 69) 一般に先史時代の石製耕耘具なるものの用途について用心が必要なことは, すでにヘルトカー (HÖLTKER, 1974) が詳論したところである。ホアロクの場合, 果してどうであるか, 一応疑問を残しつつも, ここでは報告書に従う。
 70) 出土動物については, PHAM, QUANG, 1977 : 196, 宇野氏による。
 71) 原第35図

引用 文 献

(ベトナム語については, 声調記号の類は省略した)

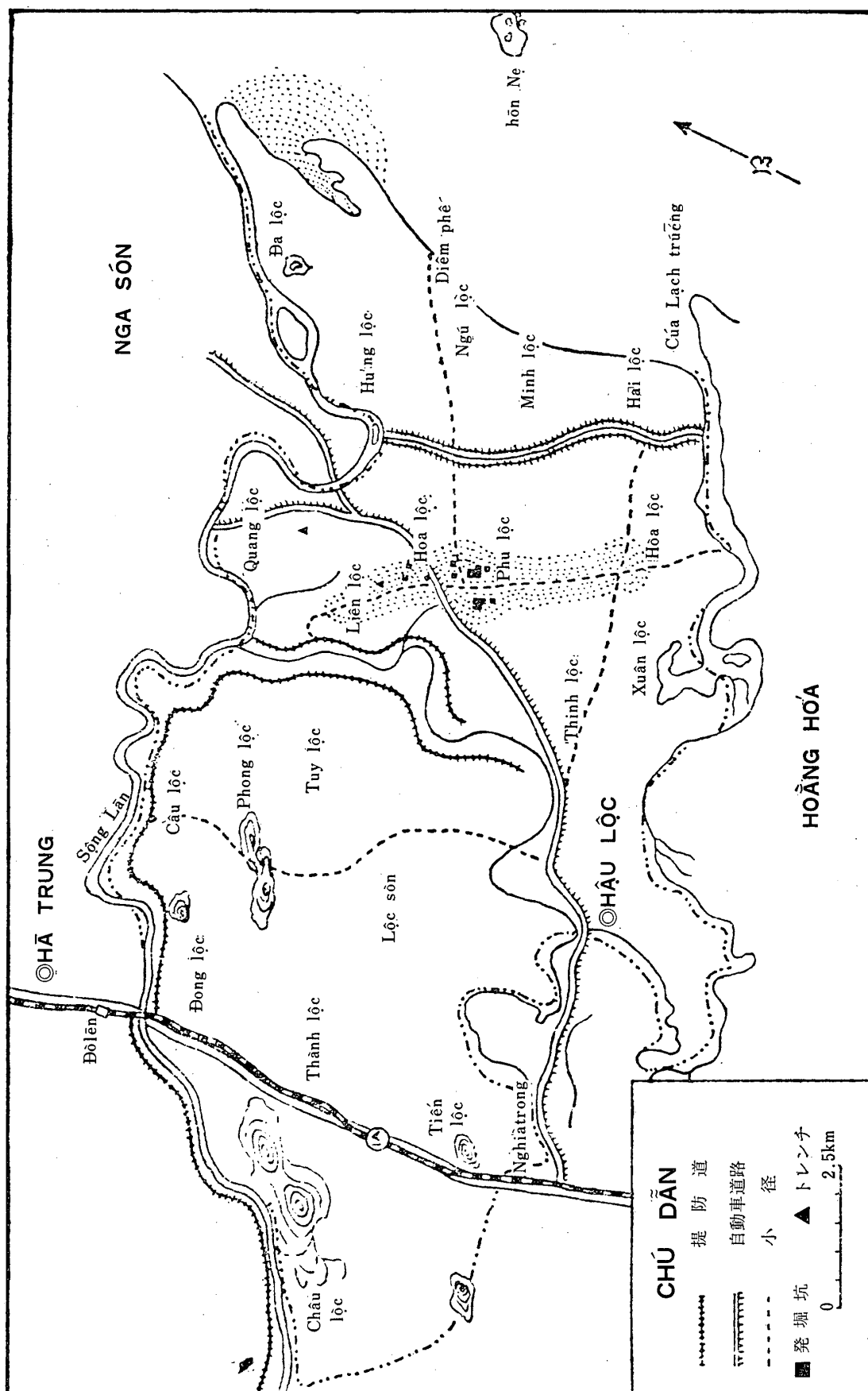
- BEZACIER, Louis., 1972, *Le Viêt Nam. Premier Fascicule (Manuel d'Archéologie d'Extrême-Orient, Première Partie, Tome II. Éditions A. et J. Picard, Paris*
 BORISKOVSII, P. I., 1968-1971, "Vietnam in primeval times", in : *Soviet Anthropology and Archaeology*, 7(2) : 14-32 ; 7(3) : 3-19 ; 8(1) : 70-95 ; 8(3) : 214-257 ; 8(4) : 355-366 ; 9(2) : 154-172 ; 9(3) : 226-264
 COLANI, Madeleine, 1928, "Notice sur la préhistoire du Tonkin", *Bulletin du Service Géologique de l'Indochine* XVII, Fasc. L I.
 --- 1930, "Recherches sur le préhistorique Indochinois", in : *Bulletin de l'École Française d'Extrême-Orient*, 30 : 299-422
 DAVIDSON, Jeremy H. C. S., 1979, "Archaeology in Northern Viet-Nam since 1954", in : R. B. SMITH and W. WATSON (eds.), *Early South East Asia* : 98-124. Oxford University Press, New York
 HA VAN TAN, 1976, "Le hoabinhien dans le contexte du Viêt Nam", in : *Données Archéologiques I (Études Vietnamiennes 46)* : 137-219. Xunhasaba, Hanoi
 HÖLTKER, Georg, 1974, "Steinerne Ackerbaugeräte. Ein Problem der Vor- und Frühgeschichte in völkerkundlicher Beleuchtung", in : *Internationales Archiv für Ethnographie*, XLV, Heft 4-6 : 77-156
 レ・スアン・ジエム, 1975, 五味正信訳「ベトナムの初期金属器時代」大林太良編『古代日本と東京アジア』(東アジアの古代文化別冊, '75) 133-143, 大和書房
 (原題 LE XUAN DIEM, "Cai giai doan phat trien van hoa thoi Hung Vuong", in : *Khao Co Hoc*, 9/10 : 22-34, 1971)
 MANSUY, H., 1920, "Gisements préhistoriques des environs de Lang-son et de Tuyen-quang, Tonkin", *Bulletin du Service Géologique de l'Indochine* VII, Fasc. II.
 MANSUY, H., et M. COLANI., 1925, "Néolithique inférieur (Bacsonien) et néolithique supérieur dans le Haut-Tonkin (dernières recherches) avec la description des crânes du gisement Lang-Cuom", *Mémoires du Service Géologique de l'Indochine* XII, Fasc. III.
 NGO SY HONG, 1980, "Binh Chau (Nghia Binh) dang di tich moi biet ve thoi dai don ve bien mien Trung", in : *Khao Co Hoc*, 1980(1) : 68-74, 93 (ゴ・シ・ホン著「ビンチャウ遺跡(ジアビン省)——中部ベトナム海岸における青銅器時代の新たに知られた形式の遺跡」『考古学』)
 NGUYEN PHUC LONG, 1975, "Les nouvelles recherches archéologiques au Viêt Nam (Complément au Viêt Nam de Louis Bezacier)", *Arts Asiatiques*, Tome XXXI, Numéro Special. Paris
 新田栄治, 1981, 「東南アジア出土の青銅鎔範」『鹿児島大学教養部史学科報告』30 : 49-67
 PATTE, Etienne, 1924, "Le kjökkenmødding néolithique du Bau Tro à Tam-Tòa près de Đông-hoi, Annam", in : *Bulletin de l'École Française d'Extrême-Orient*, 24 : 521-561
 PHAM VAN KINH, QUANG VAN CAY, 1977, *Van Hoa Hoc Loc*. (Vien Bao Tang Lich Su Viet Nam), (フアム・ヴァン・キン, クアン・ヴァン・カイ著『ホアロク文化』ベトナム歴史博物館)
 TRAN QUOC VUONG, HA VAN TAN, DIEP DINH HOA, 1975, *Co So Khao Co Hoc*. Nha Xuat Ban Dai Hoc Va Trung Hoc Chuyen Nghiep. Hanoi (チャン・クオク・ヴォン, ハ・ヴァン・タン,

ホアロク文化とそのベトナム先史時代における位置づけ

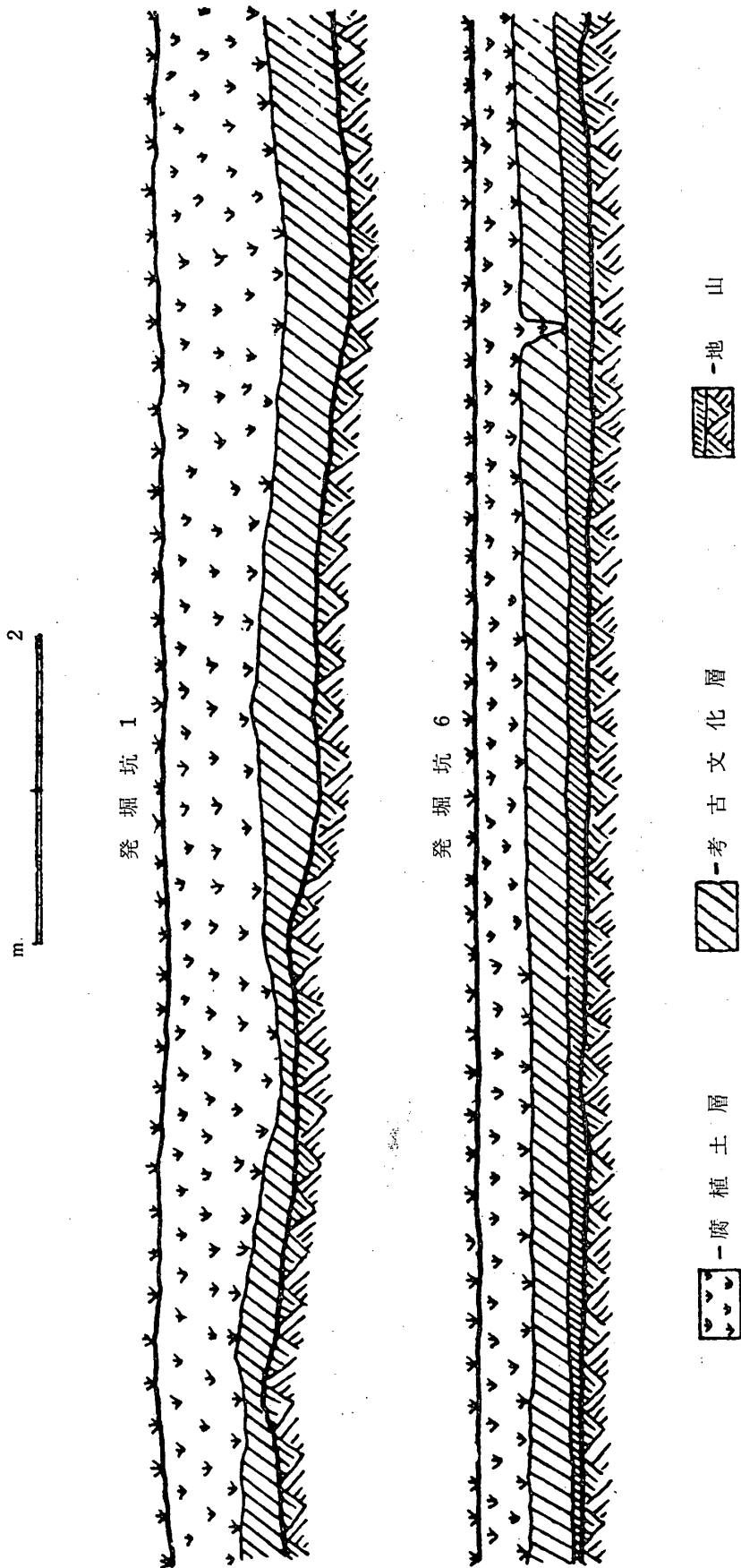
ディプ・ディン・ホア著『考古学の基礎』)

Uy Ban Khoa Hoc Xa Hoi Viet Nam, 1971, *Lich Su Viet Nam*. Tap I. Nha Xuat Ban Khoa Hoc Xa Hoi. Hanoi (ベトナム社会科学委員会編『ベトナム歴史』第一巻)

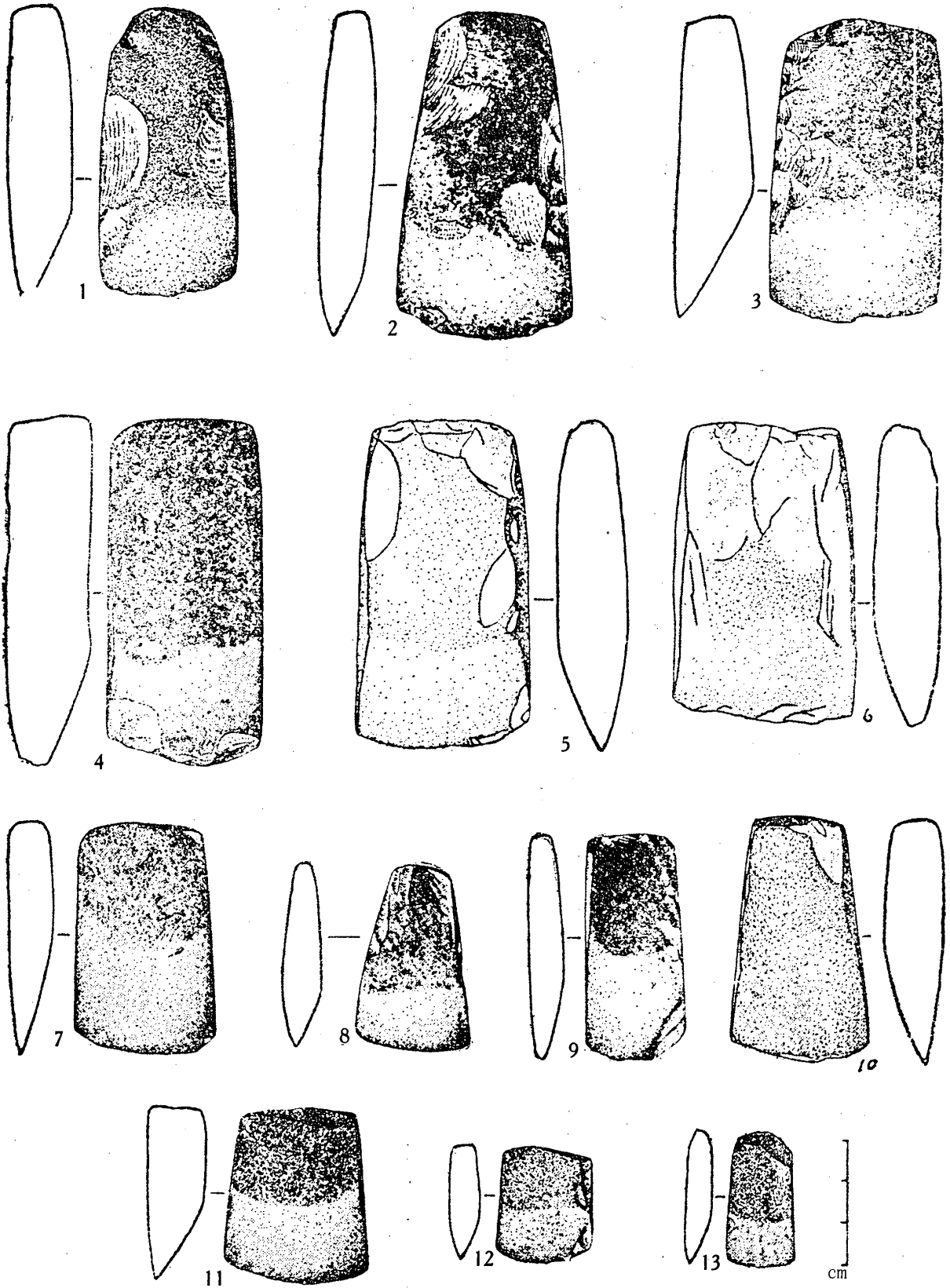
WATSON, William, 1979, "Kok Charoen and the Early Metal Age of Central Thailand", in: R. B. SMITH and W. WATSON (eds.), *Early South East Asia*: 53-62. Oxford University Press, New York



第1図 ホアロク文化

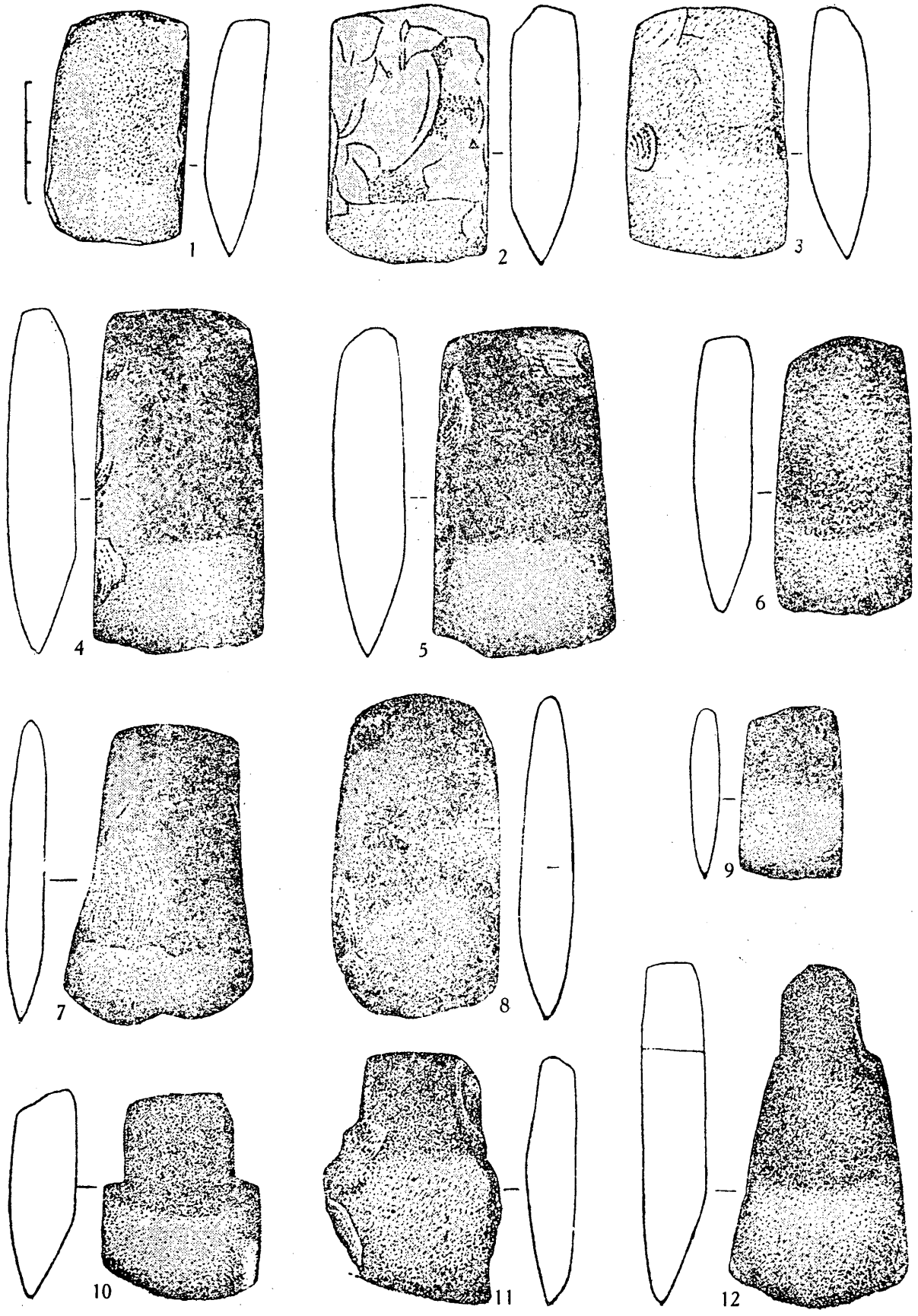


第2図 ホアロク遺跡断面

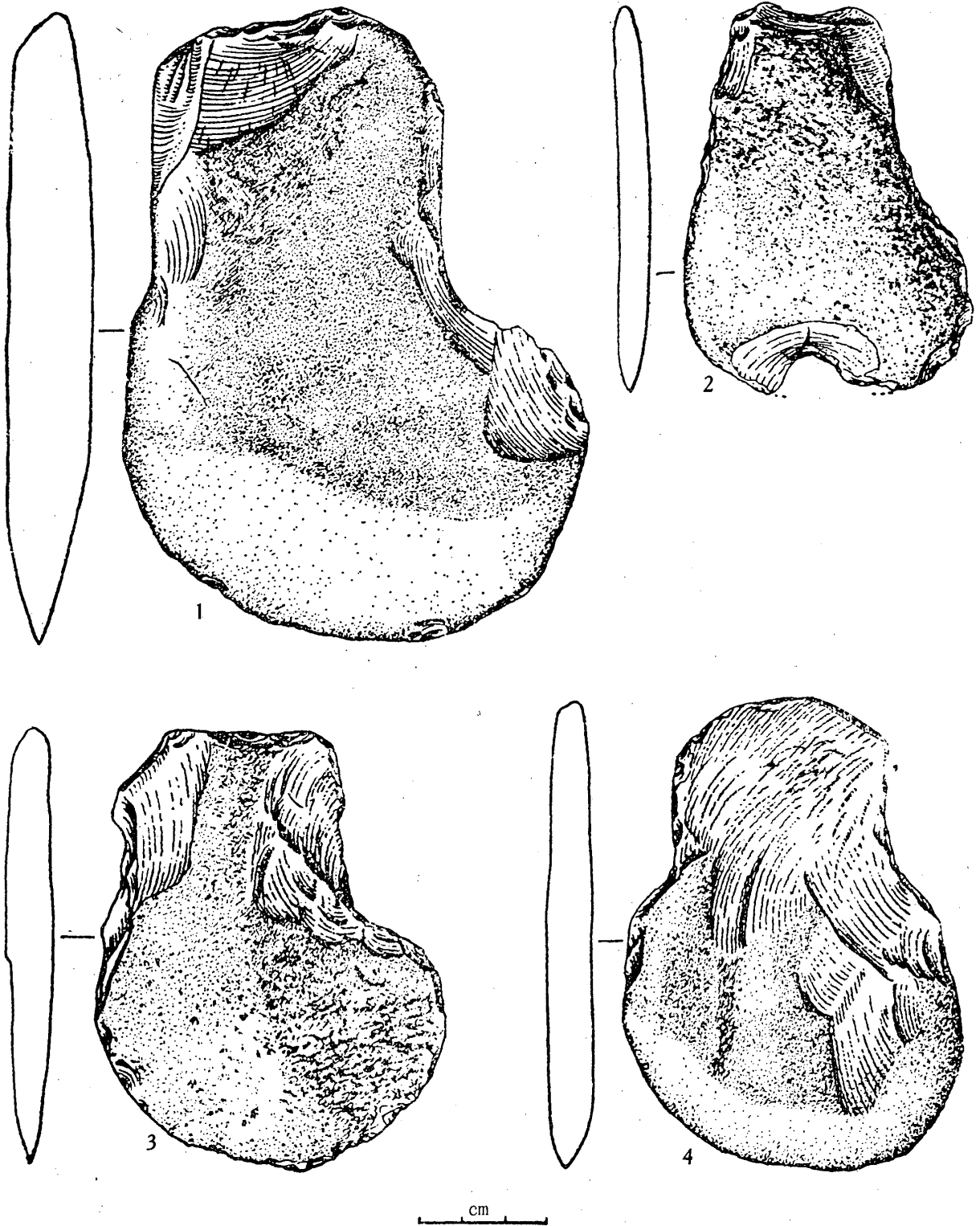


第3図

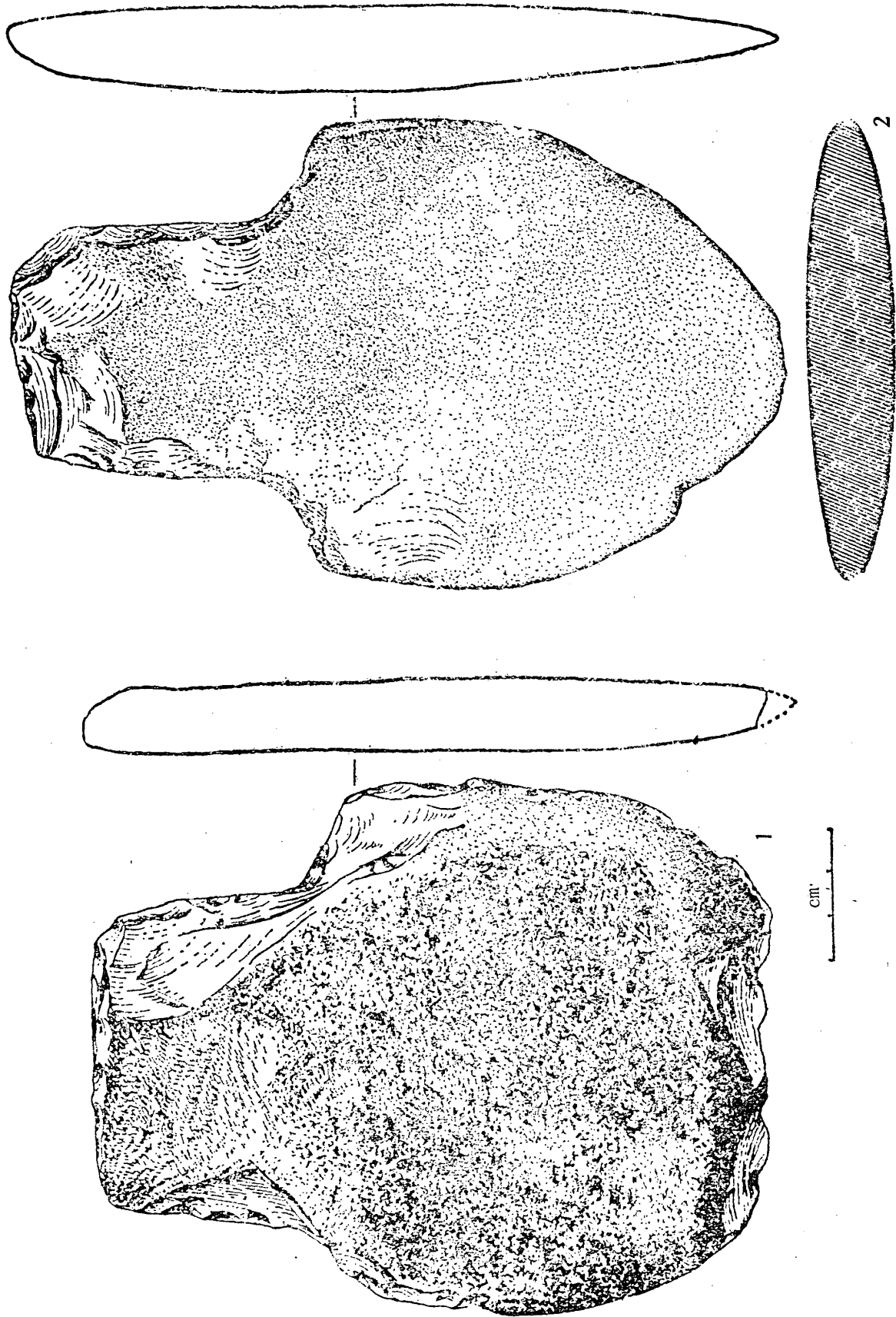
ホアロク文化とそのベトナム先史時代における位置づけ



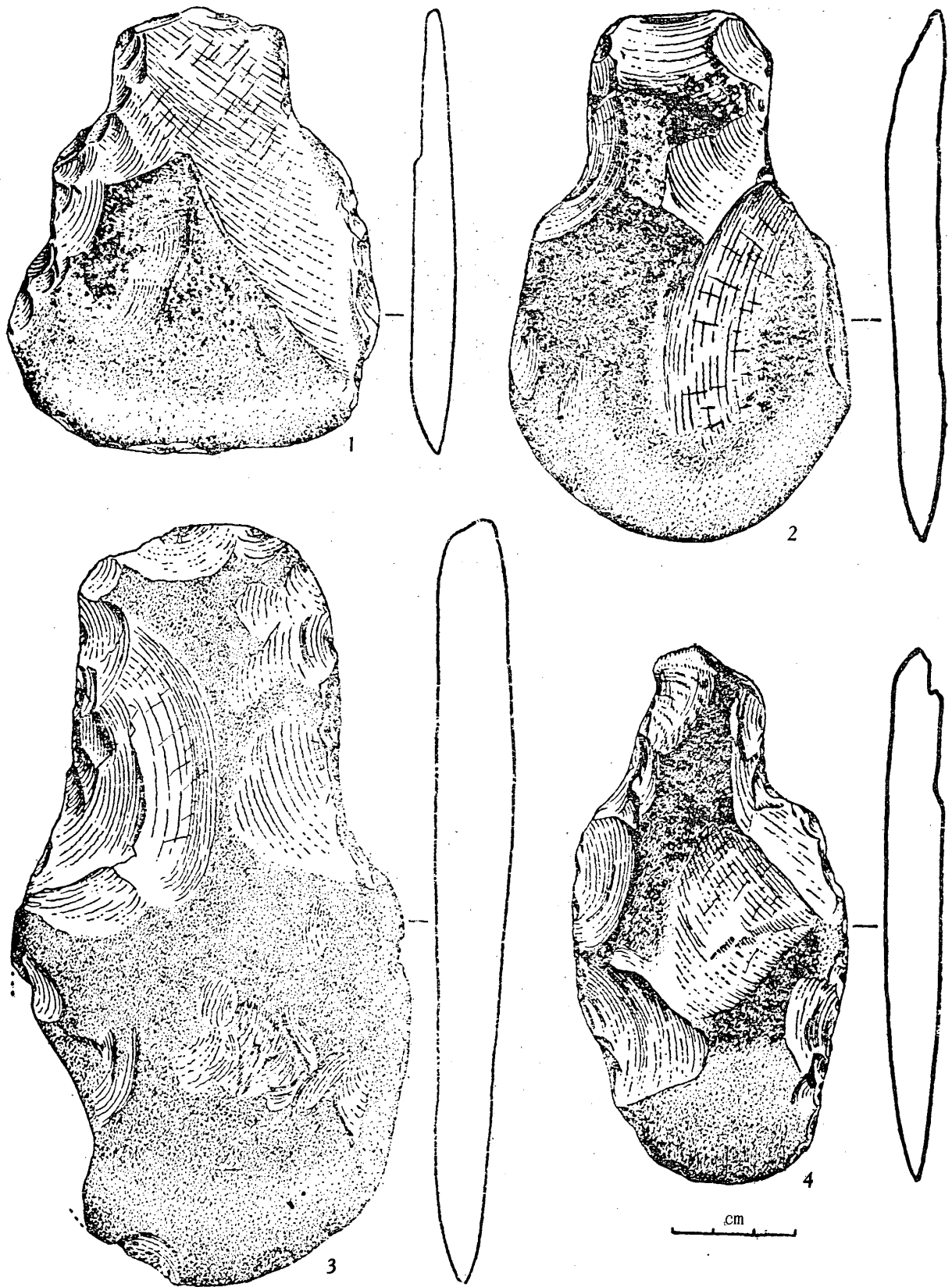
第4図



第5図 靴型石斧 ホアロク遺跡

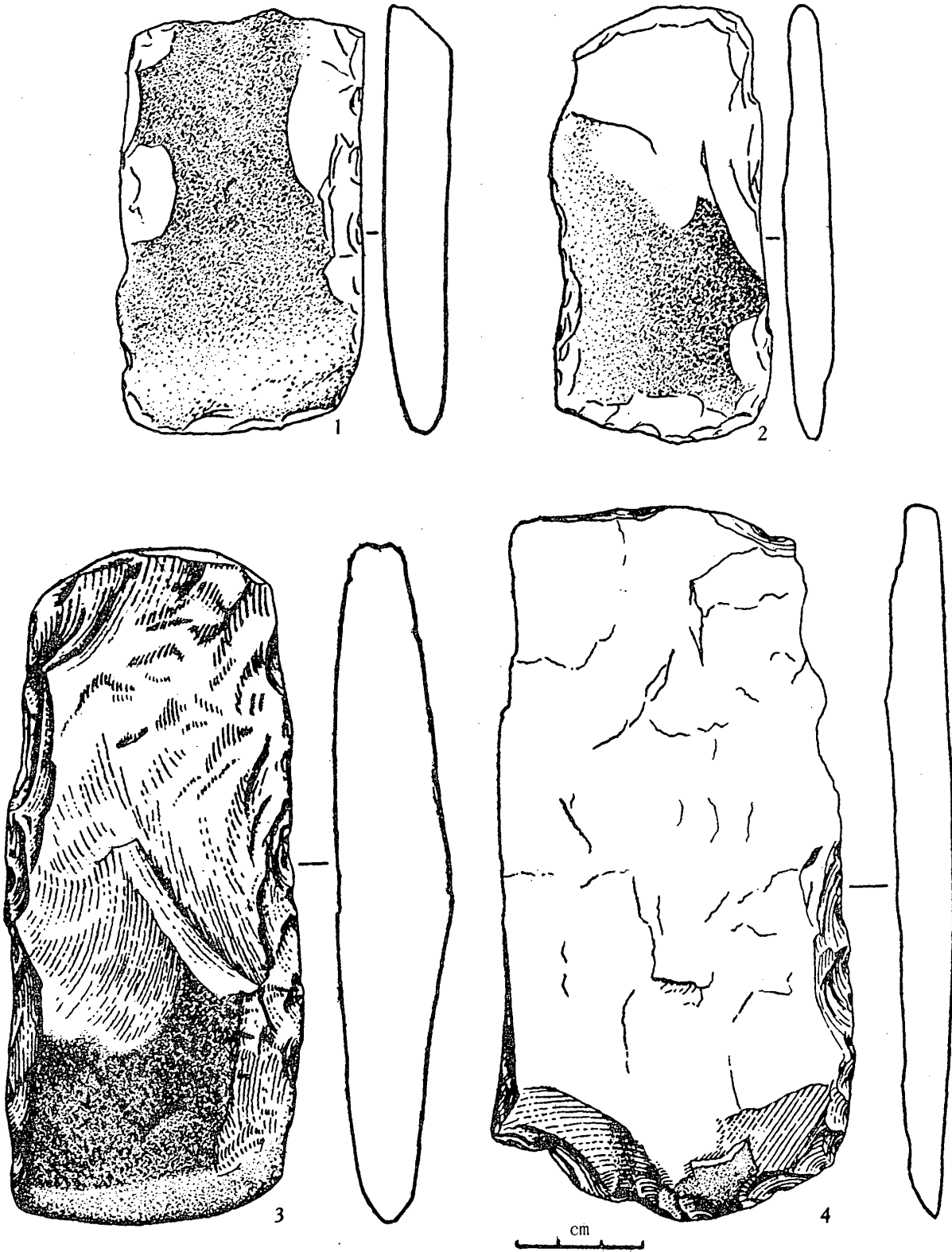


第6図



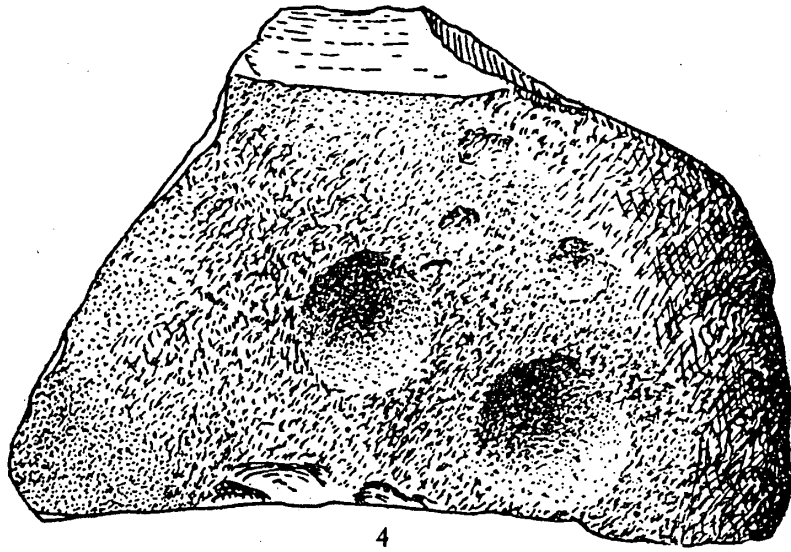
第7図

ホアロク文化とそのベトナム先史時代における位置づけ



第8図

大 林 太 良

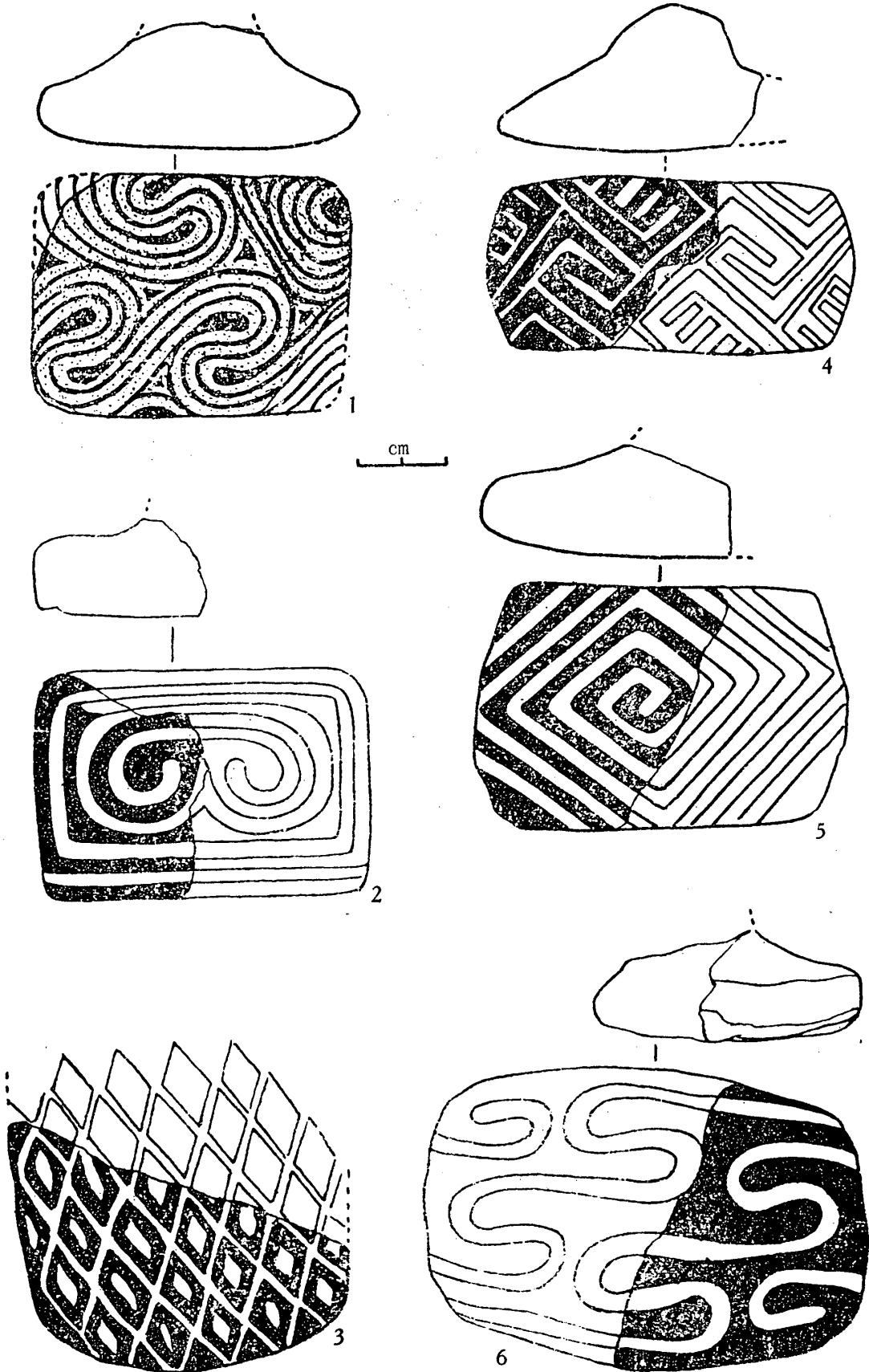


4

cm

第 9 图

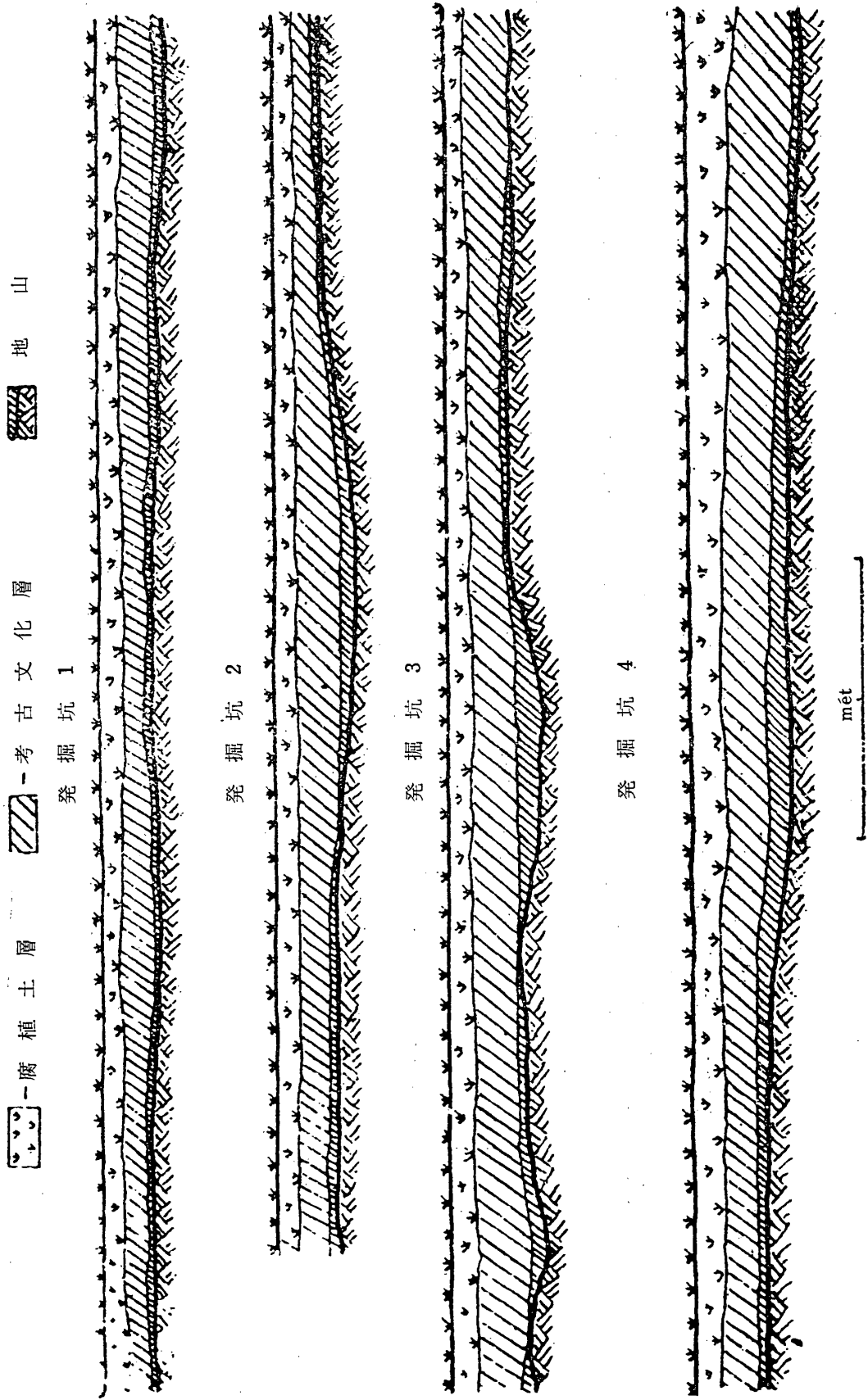
ホアロク文化とそのベトナム先史時代における位置づけ



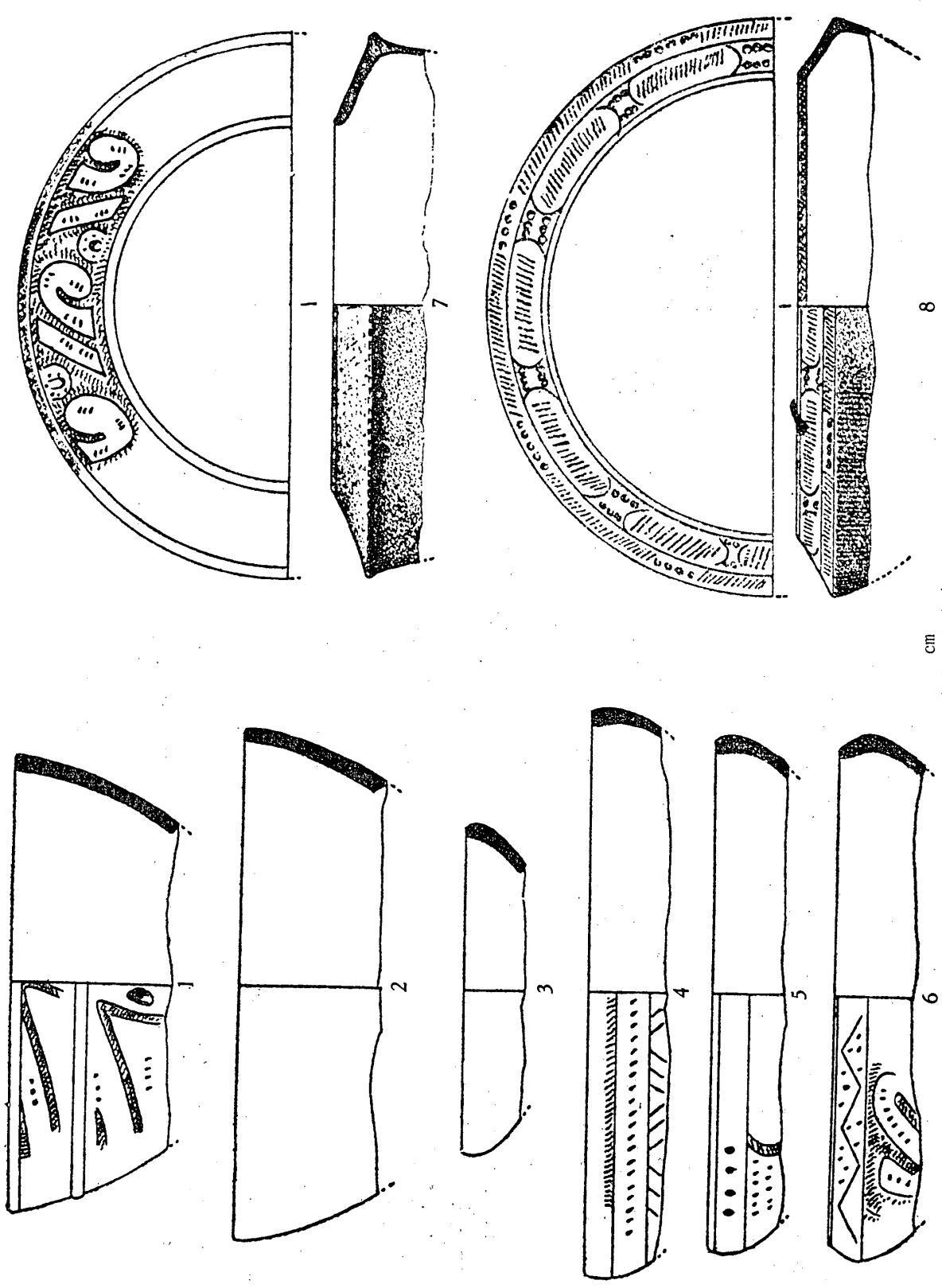
第10図



第11图

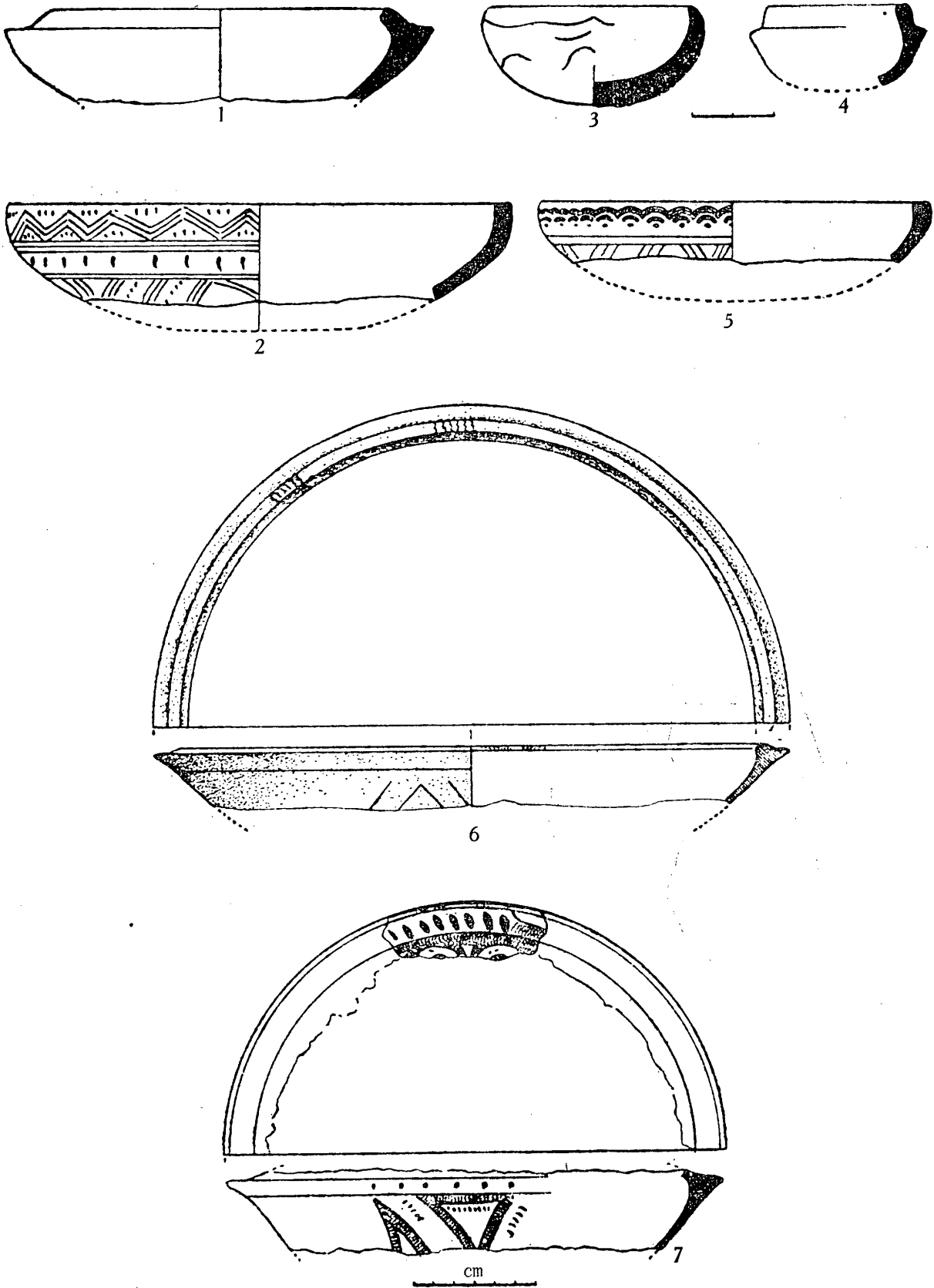


第12図

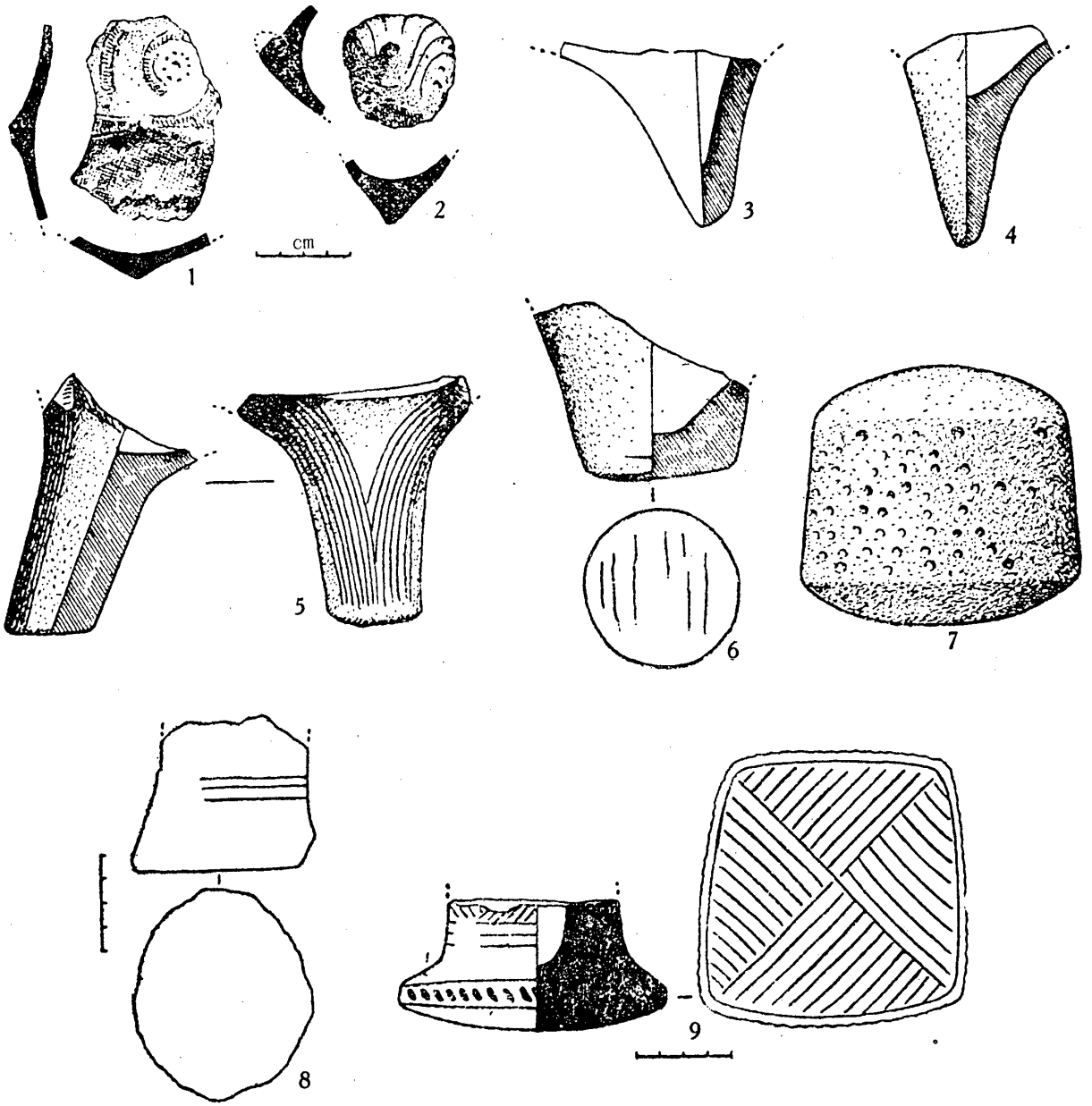


第13图

ホアロク文化とそのベトナム先史時代における位置づけ

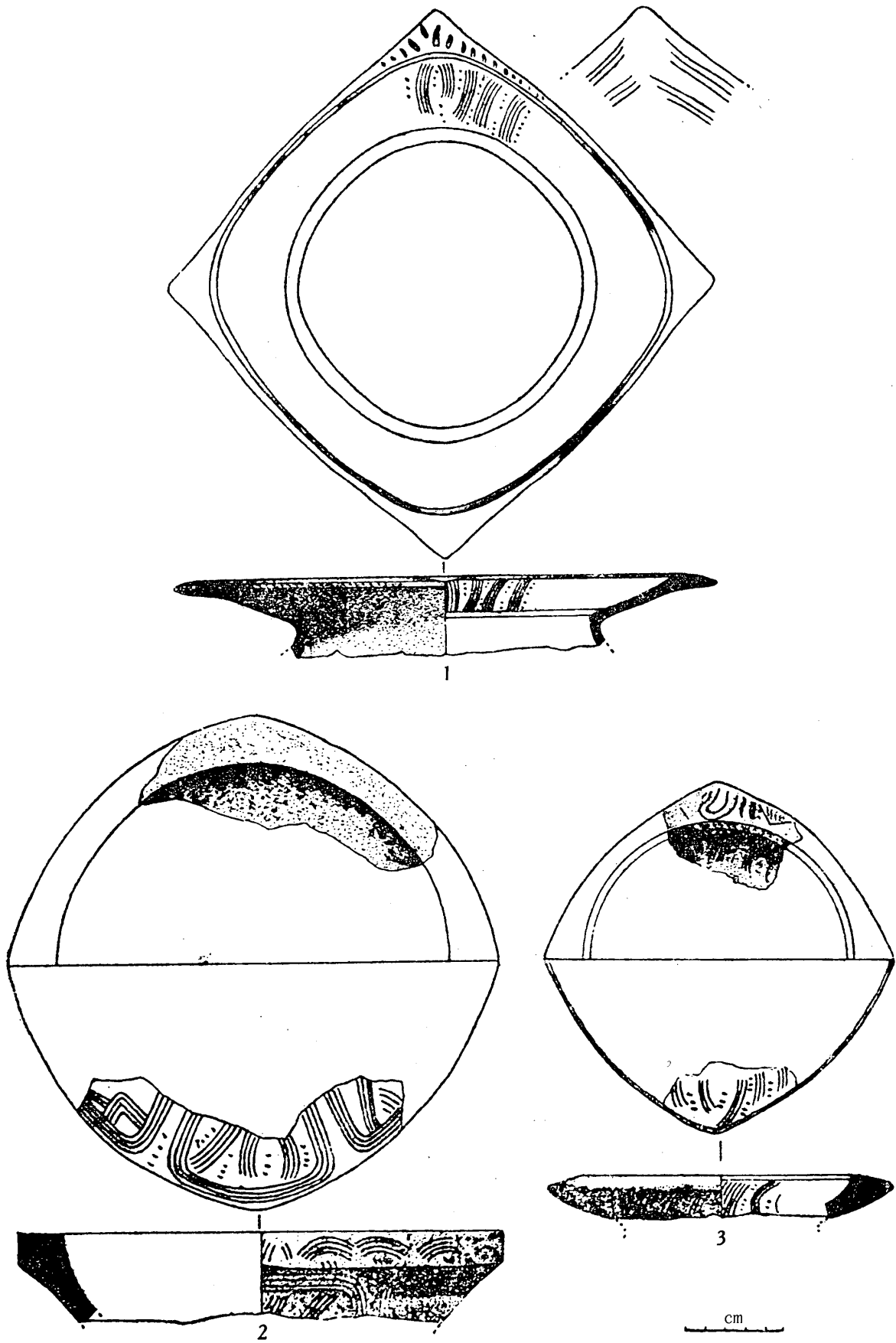


第14図

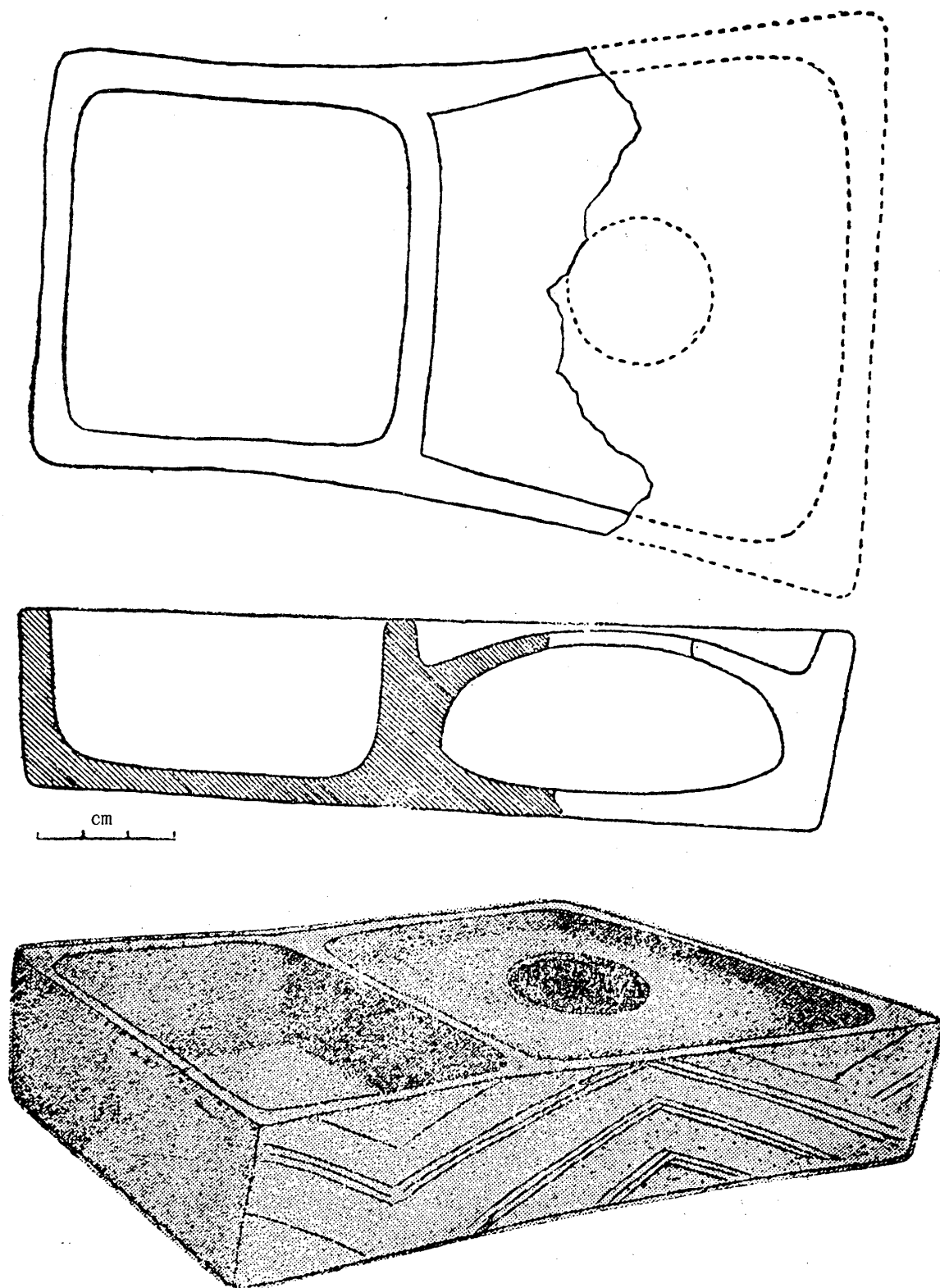


第15図

ホアロク文化とそのベトナム先史時代における位置づけ



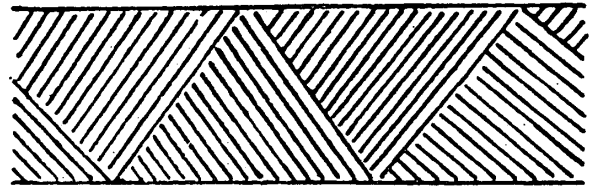
第16図



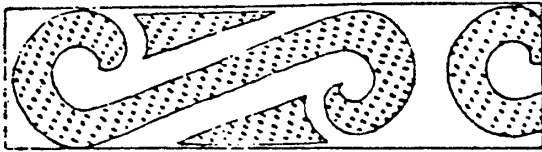
第17图



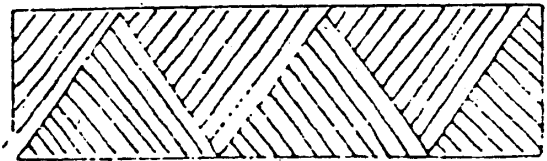
1 ホアロク



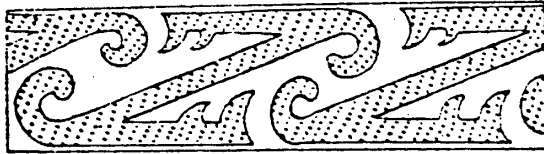
1 ホアロク



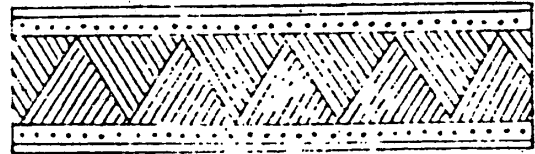
2 フングエン



2 フングエン



3 ドンソン



3 ドンソン

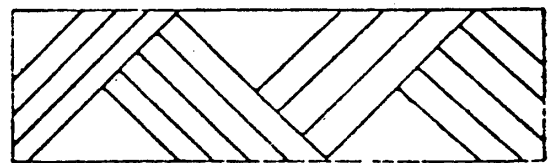


4 ドンダウ

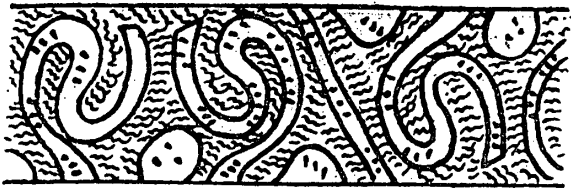


第18図 土器文様の比較1 (左)

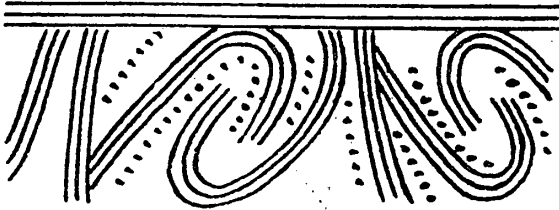
第19図 土器文様の比較2 (右)



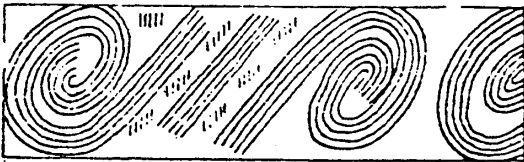
5. ゴムン



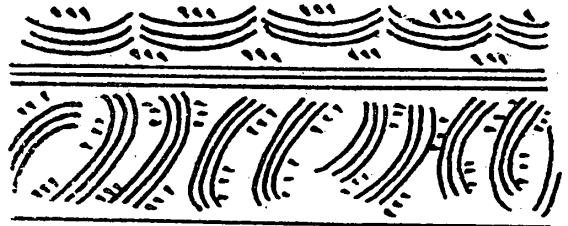
1 ホアロク



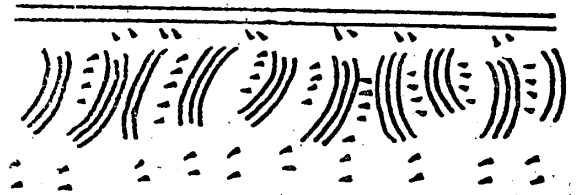
2 ホアロク



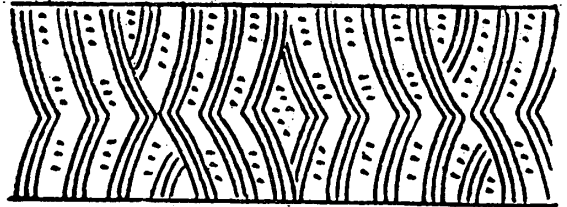
3 ドンダウ



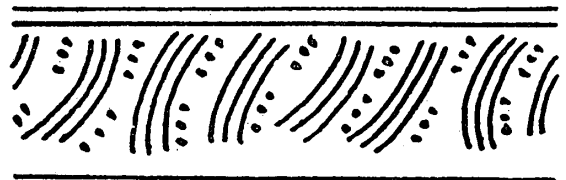
1 ホアロク



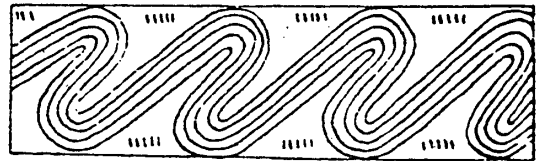
2 ホアロク



3 ホアロク



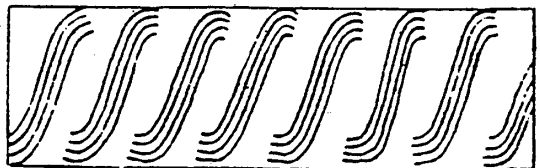
4 ホアロク



5



6 ドンダウ

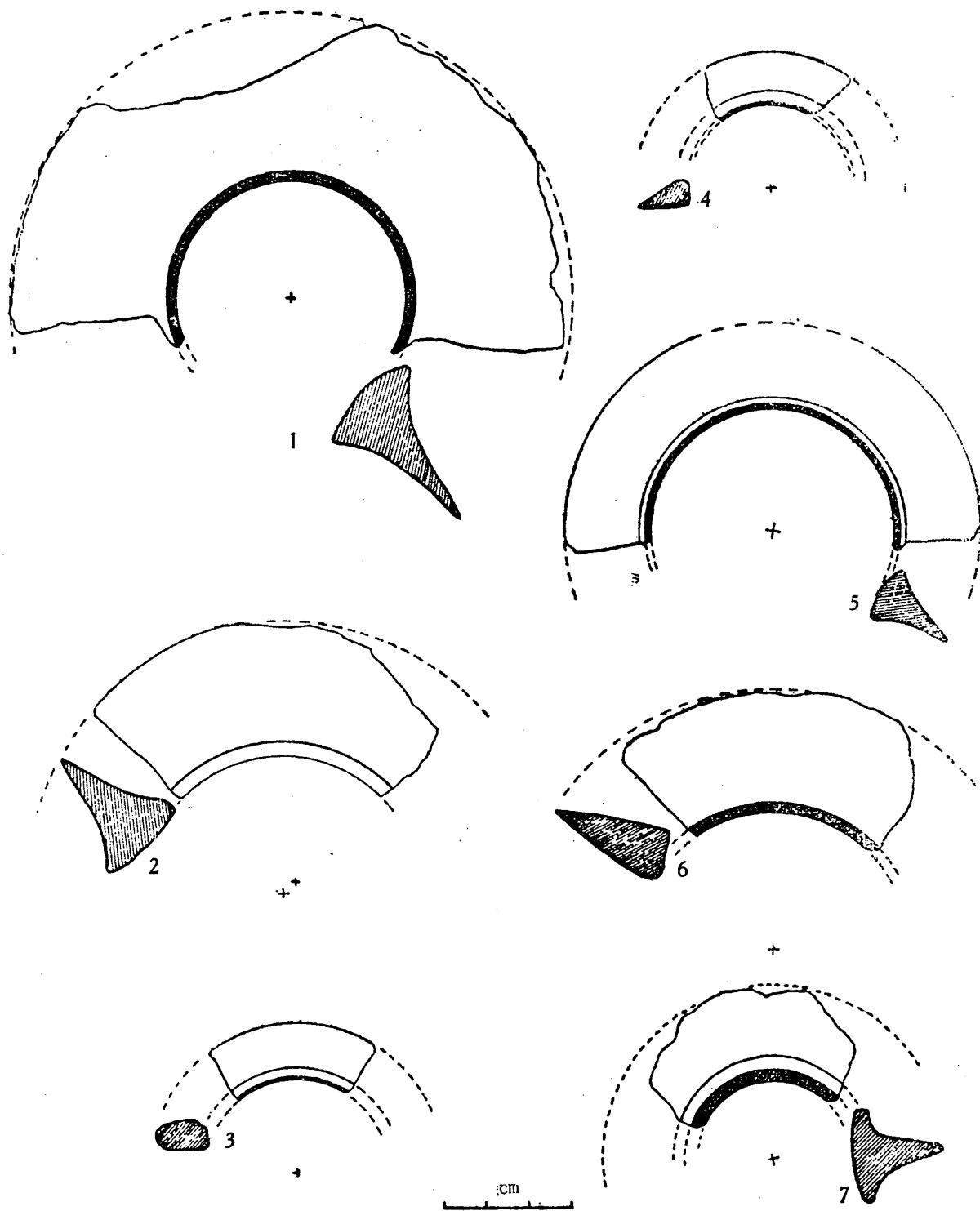


7

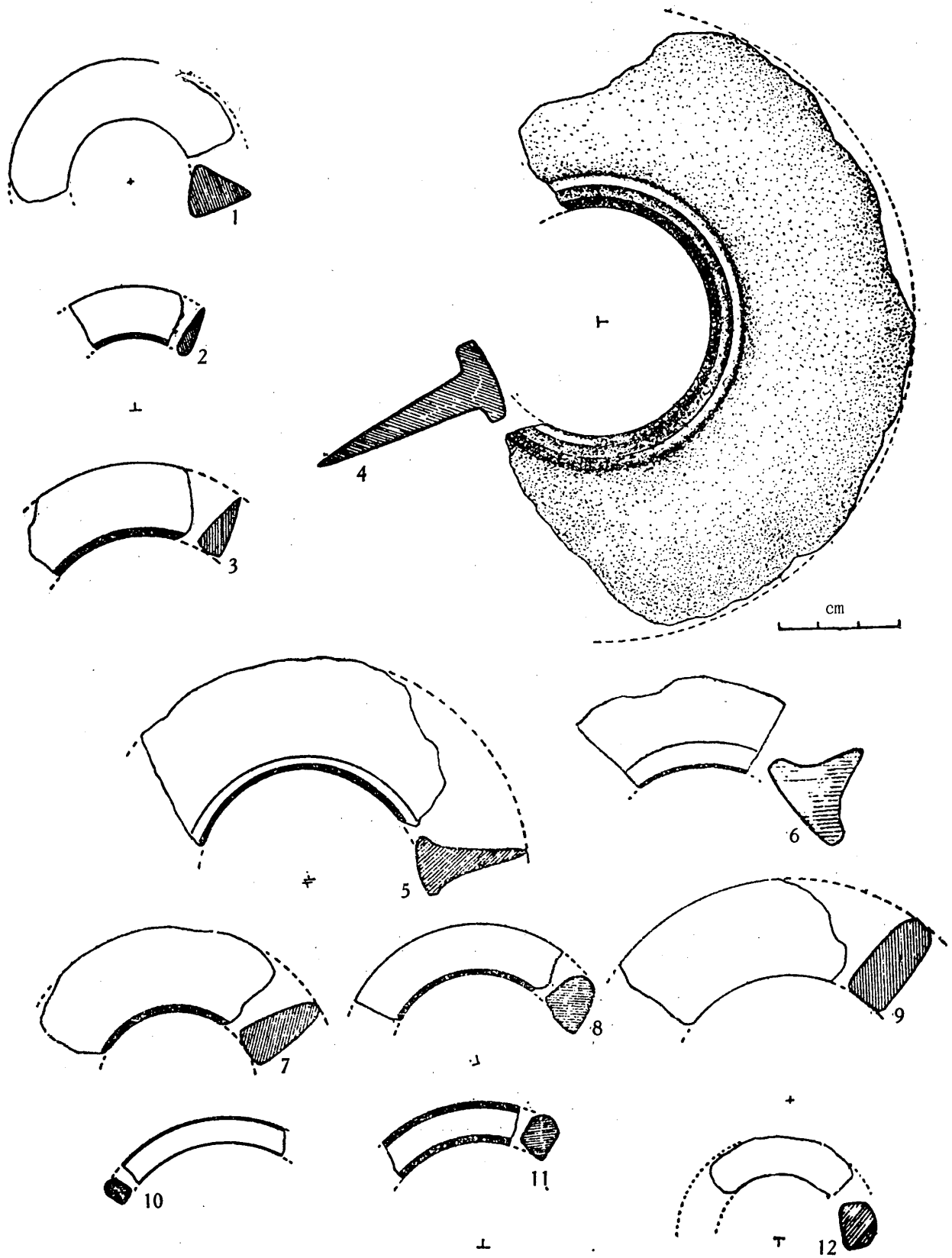
第20図 土器文様の比較3 (左)

第21図 土器文様の比較4 (右)

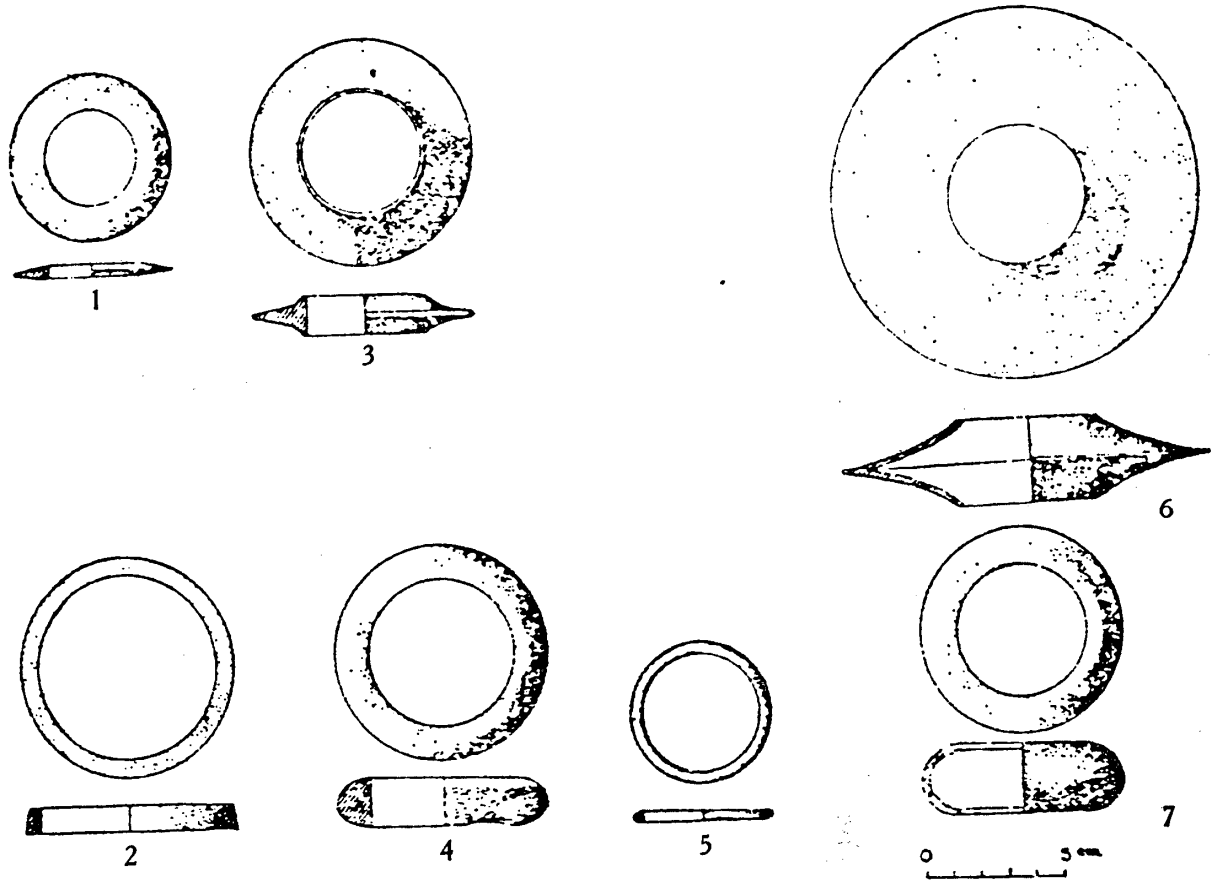
ホアロク文化とそのベトナム先史時代における位置づけ



第22図 ホアロク遺跡



第23図 フロク遺跡



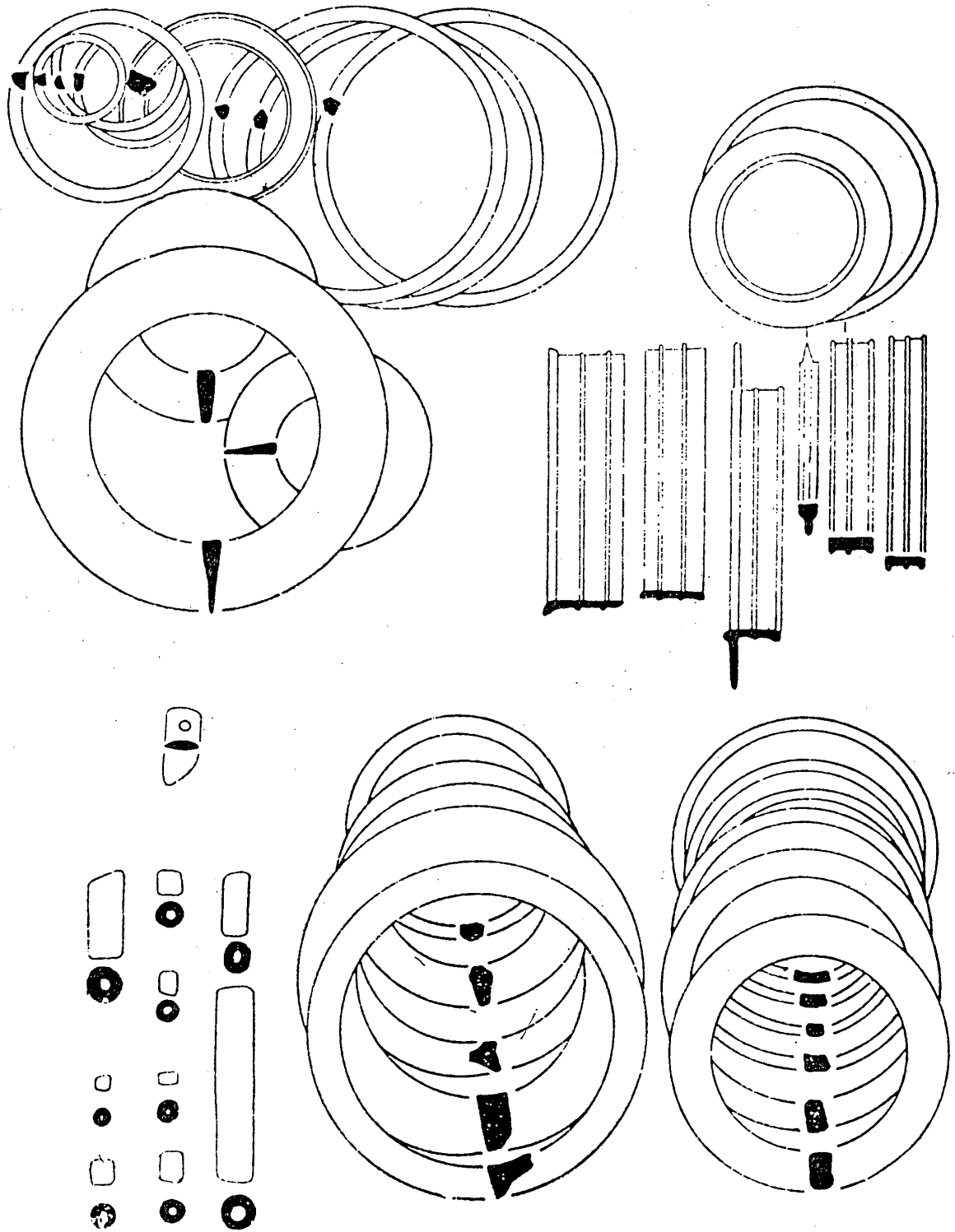
1-2 フングン
(石製)

3-4 ドンダウ
(石製)

5 ゴムン
(石製)

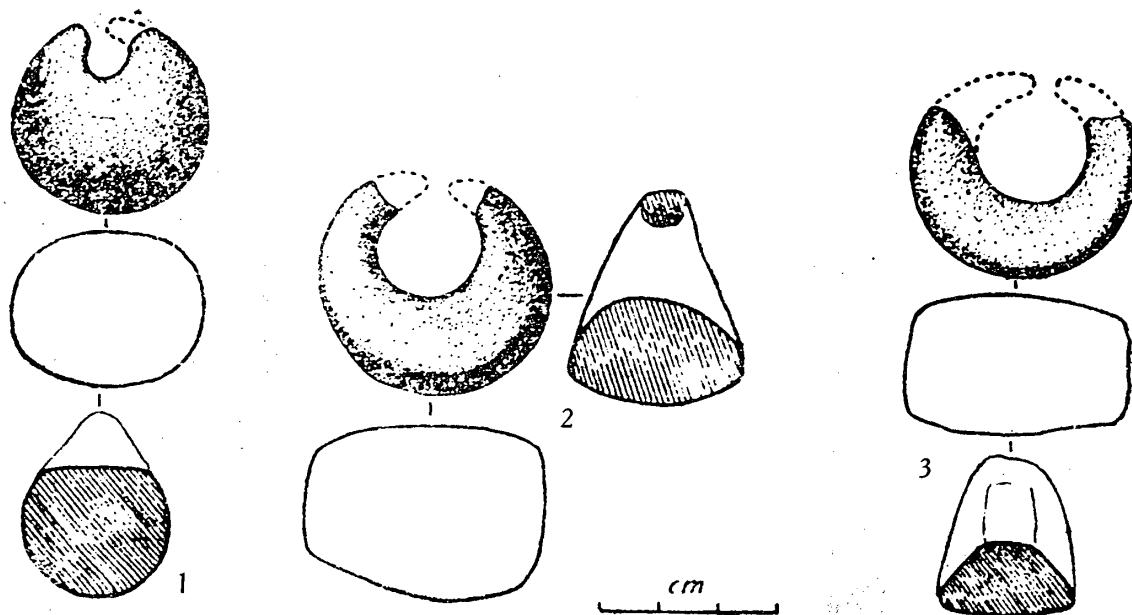
6-7 ドンソン
(青銅製)

第24図 腕輪の変遷

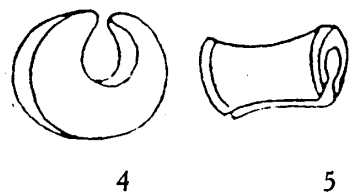


第25図 フングエン文化 腕輪と管玉

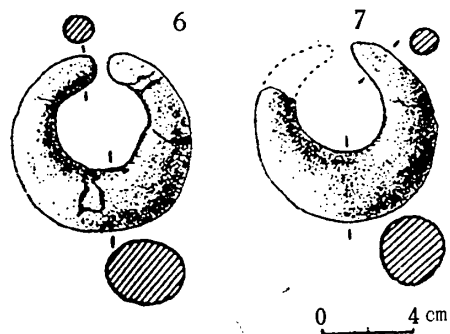
ホアロク文化とそのベトナム先史時代における位置づけ



ホアロク文化 (フロック遺跡)

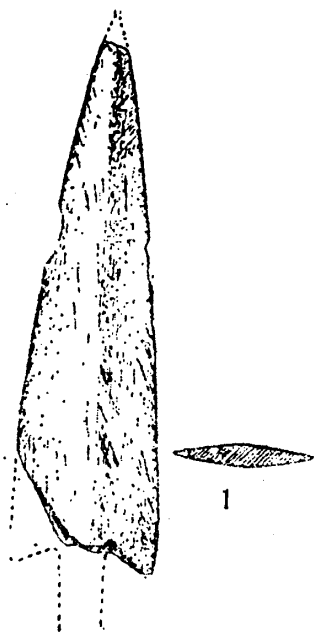


ドンダウ文化



ビンチャウ遺跡

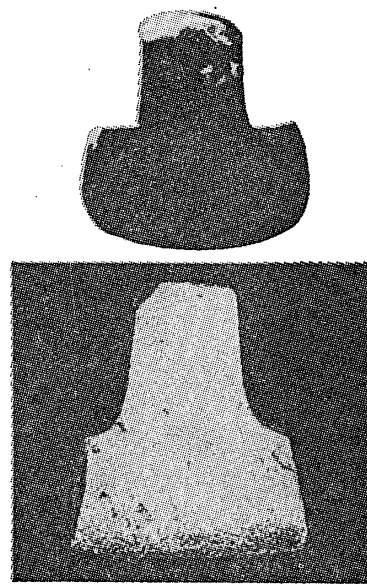
第26図 蛭状耳飾り



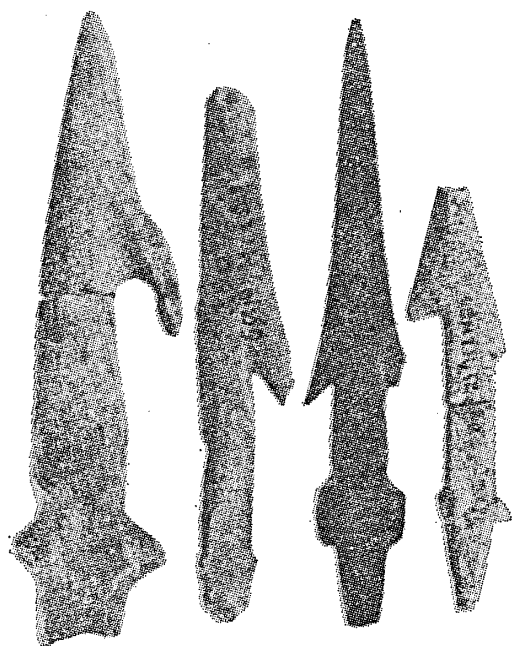
ホアロク文化



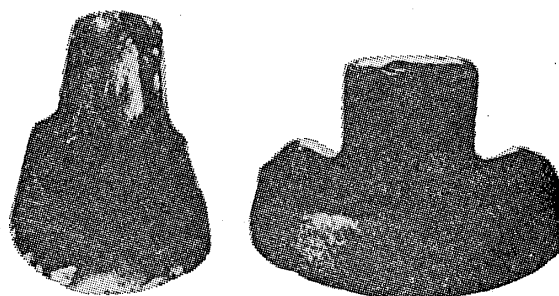
フロク遺跡(石製)



バロン湾文化



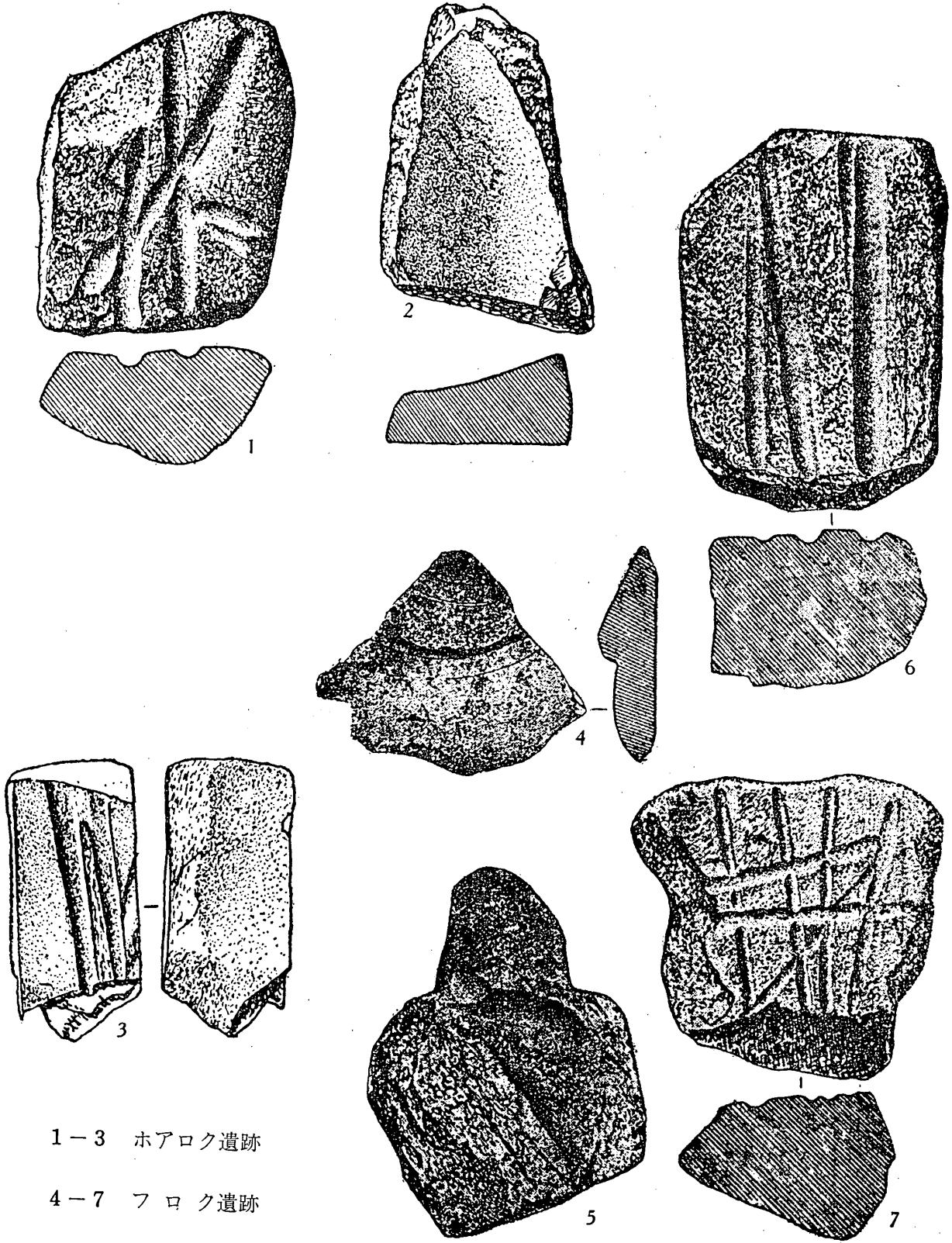
ドンダウ文化(骨製)



バンチョ遺跡

第27図 槍 先(左)

第28図 有肩石斧(右)



1-3 ホアロク遺跡

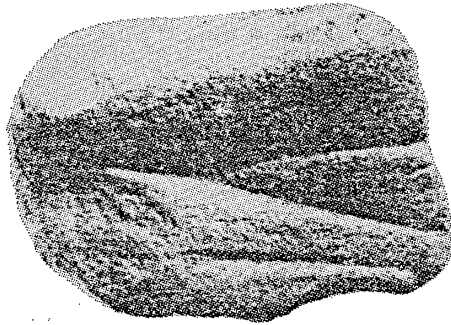
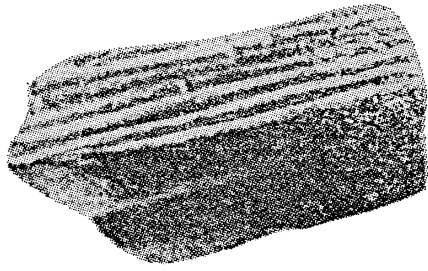
4-7 フロク遺跡

cm

第29図 砥石

大林 太良

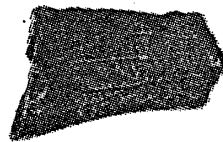
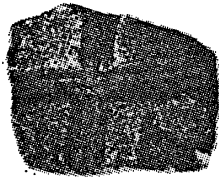
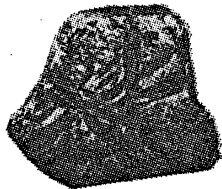
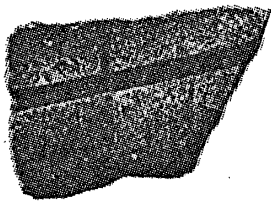
フングエン文化



ハロン湾文化

ドンモー(Dong mo)

遺 跡



第30図 砥 石